

ひがし いる べ
東入部遺跡群 4

—第8次・第9次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集

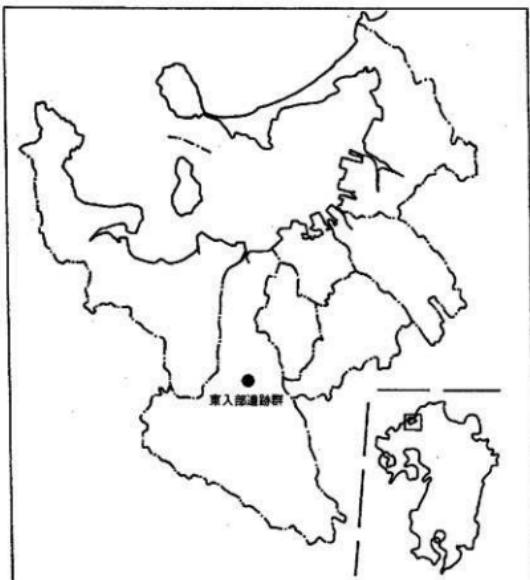
1995

福岡市教育委員会

HIGASHI IRU BE 東入部遺跡群 4

—第8次・第9次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集



遺跡略号 HGI-8

HGI-9

調査番号 9348

9418

1995

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、子孫に伝えることは私たちの義務であり、本市では「海と歴史を描いた文化の都市像」を目標のひとつとしてまちづくりを行なっています。

しかし、近年の都市開発事業によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であります。このため本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は国道263号線改良事業に伴って調査した早良区東入部遺跡群の第8次・9次調査の成果を報告するものです。同遺跡は縄文時代から中世にいたるまで長い歩みを有し、今回の調査においても多くの資料を得ることができました。入部地区の歴史を解明する上で、大きな手がかりになるものと考えられます。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、御理解と御協力を賜りました数多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例　　言

- 本書は福岡市土木局道路建設第1課による一般国道263号線道路改良事業に伴い、福岡市教育委員会が早良区東入部地内において発掘調査を実施した東入部遺跡群第8次・第9次の調査報告書である。
- 本書で報告した各調査の細目は以下の通りである。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
第8次	9348	HGI-8	218.4m ²	1993.11.9～11.26
第9次	9418	HGI-9	151.7m ²	1994.5.25～6.25

- 本書に掲載した遺構実測図の作成は第8次調査を榎本義嗣・黒田和生・英豪之、第9次調査を池田祐司・澤下孝信・坂本憲昭が行なった。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は第8次調査を榎本・黒田、第9次調査を池田が行なった。
- 本書に掲載した遺構写真的撮影は第8次調査を榎本、第9次調査を池田が行なった。
- 本書に掲載した遺物写真的撮影は第8次調査を榎本、第9次調査を平川敬治が行なった。
- 本書に掲載した挿図の製図は第8次調査を榎本、第9次調査を池田が行い、一部戸畠智恵子の協力を得た。
- 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21'西偏する。
- 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、河川をSR、堅穴住居をSC、土坑をSK、ピットをSPと略号化した。
- 遺構・遺物番号は各調査次ごとに通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆はI.-2.2・IV.を池田、他を榎本が行なった。
- 本書の編集は池田・榎本が行なった。

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査組織	1
1)	第8次調査	1
2)	第9次調査	1
II.	遺跡の立地と環境	2
III.	第8次調査の記録	5
1.	調査概要	5
2.	層序	5
3.	遺構と遺物	5
1)	掘立柱建物	5
2)	河川	9
3)	竪穴住居	15
4)	土坑	15
5)	その他の遺構と遺物	16
IV.	第9次調査の記録	17
1.	調査概要	17
2.	層序	17
3.	遺構と遺物	17
1)	河川	17
2)	土坑	28
V.	結語	29

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図(1/10,000)	3
第2図	調査区位置図(1/1,000)	4
第3図	東入部遺跡群第8次A区遺構配置図(1/200)、西壁土層実測図(1/80)	6
第4図	東入部遺跡群第8次B区遺構配置図(1/200)、東壁土層実測図(1/80)	7
第5図	SR051-052-053-054実測図(1/80)	8
第6図	SB053-054出土遺物実測図(1/3)	9
第7図	SR001出土遺物実測図(1)(1/3)	10
第8図	SR001出土遺物実測図(2)(1/3)	11
第9図	SR001出土遺物実測図(3)(1/3)	12
第10図	SR001出土遺物実測図(4)(1/3)	13
第11図	SR002出土遺物実測図(1/3)	14
第12図	SC184実測図(1/40)	14

第13図	SC184遺物実測図(1/3)	14
第14図	SK003・185実測図(1/40)	15
第15図	SK003・185出土遺物実測図(1/3)	15
第16図	ピット・遺構検出面出土遺物実測図(1/3)	16
第17図	東入部遺跡群第9次遺構配置図(1/200)	18
第18図	1区土層実測図(1/40)	19
第19図	2区土層実測図(1/40)	20
第20図	遺構実測図(1/40)	21
第21図	SR001・005出土遺物実測図(1)(1/3)	22
第22図	SR001・005出土遺物実測図(2)(1/3)	23
第23図	SR015出土遺物実測図(1)(1/3)	24
第24図	SR015出土遺物実測図(2)(1/3)	25
第25図	SR016出土遺物実測図(1/3)	26
第26図	SR016下層出土遺物実測図(1/3,1/1)	27
第27図	第4・5・8・9次調査区遺構変遷図(1/1,000)	30

図版目次

図版 1 第8次調査	(1)A区全景(南から) (3)B区南側全景(北から)	(2)B区北側全景(北から)
図版 2 第8次調査	(1)A区西壁土層(南東から) (3)B区南側東壁土層(北西から)	(2)B区北側東壁土層(北西から)
図版 3 第8次調査	(1)B区SB051(北から) (3)B区SC184上層(北から)	(2)B区SC184(南から)
図版 4 第8次調査	(1)B区SK003(東から) (3)作業風景	(2)B区SK185(東から)
図版 5 第8次調査	出土遺物 I	
図版 6 第8次調査	出土遺物 II	
図版 7 第9次調査	(1)1区南半(南から)	(2)1区北半(南から)
図版 8 第9次調査	(1)2区北半(南から)	(2)SR015(北から)
図版 9 第9次調査	(1)2区上面足跡状遺構(西から)	(2)SK014(東から)
図版10 第9次調査	(1)SK003(東から)	(2)SR001遺物出土状況
図版11 第9次調査	(1)SR015西壁	(2)出土遺物 I
図版12 第9次調査	出土遺物 II	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市土木局では一般国道263号線道路改良事業(道路幅拡幅、自転車歩行者道建設)を継続し実施している。1993(平成5)年8月11日同局道路建設第1課より福岡市早良区大字東入部地内の同事業に伴う埋蔵文化財事前調査願が同市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。

これを受けた埋蔵文化財課では申請地が東入部遺跡群第4次及び第5次調査地に隣接しており、その調査成果より遺構の広がりが十分看取されることから土木局と協議をもった。その結果、事業に伴い遺跡の保存は困難と判断し、同年11月9日より第8次調査を実施することとなった。

また、1994(平成6)年2月11日には第8次調査隣接地において同事業に伴う埋蔵文化財事前調査願が提出され、同様の協議の結果、同年5月25日より第9次調査を実施することとなった。

2. 調査組織

1) 第8次調査

調査委託：福岡市土木局道路建設第1課

調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査統括：埋蔵文化財課長 折尾学

同課第1係長 横山邦繼

調査庶務：同課第1係 入江幸男

事前審査：同課主任文化財主事 井澤洋一(前任) 濱石哲也

同課文化財主事 長家伸

調査担当：同課第1係文化財主事 梶本義嗣

調査員：黒田和生 英豪之

調査作業：山川賢造 間部喜久美 緒方シマヨ 柳沢ミコ 鶴田喜美枝 平川土枝 平川富美子 平川伸子

満田雅子 山口タツエ 吉岡勝野

整理作業：西島信枝 日名子節子 松尾真澄

2) 第9次調査

調査委託：福岡市土木局道路建設第1課

調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査統括：埋蔵文化財課長 折尾学

同課第1係長 横山邦繼

調査庶務：同課第1係 入江幸男

事前審査：同課主任文化財主事 濱石哲也

同課文化財主事 長家伸

調査担当：同課第1係文化財主事 池田祐司

調査員：澤下孝信 坂本憲昭

調査作業：青柳寿子 青柳美智子 因ヨシ子 海津宏子 舟光アヤ子 栗木和子 小柳和子 坂原美佐子

高橋茂子 長谷川律子 土生喜代子 広瀬梓 細川友喜 真名子シズエ 三谷朗子 満田雅子 三好道子

整理作業：上田保子 前田みゆき

II. 遺跡の立地と環境

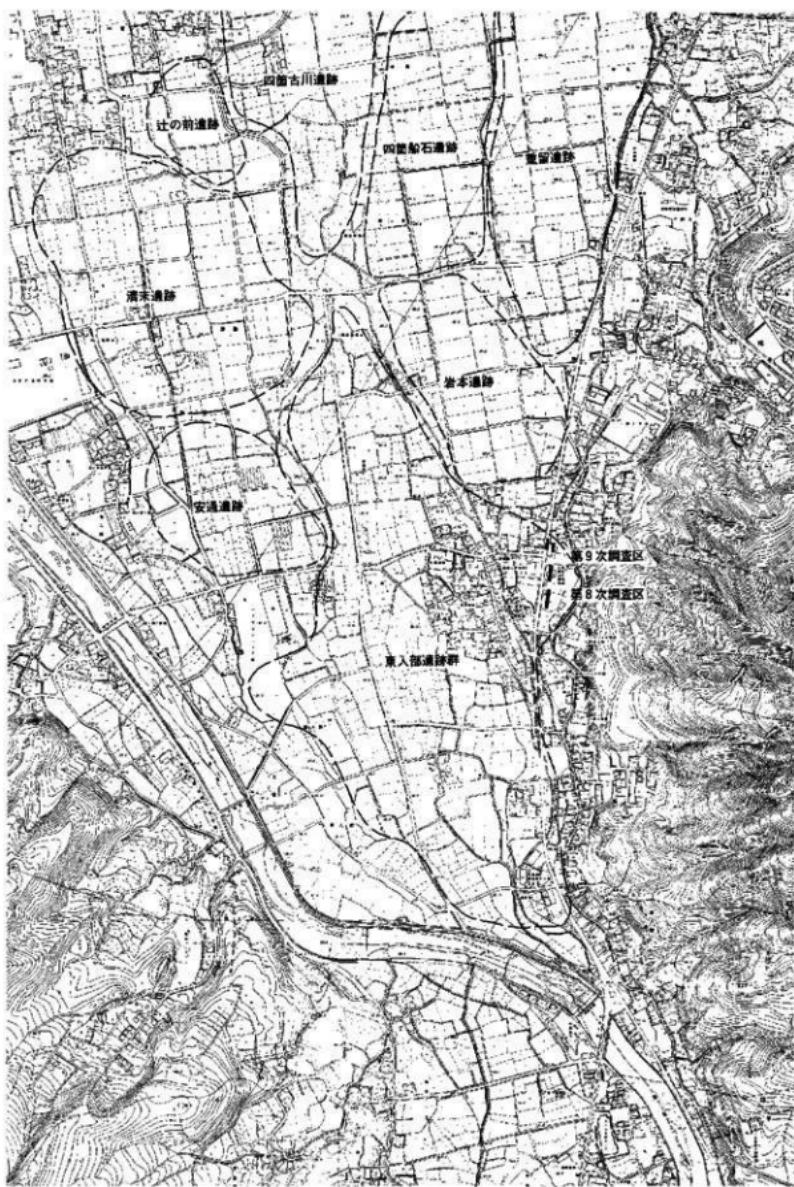
玄界灘に北面し、背後に脊振・三郡山系をひかえる福岡市にはこれらの山系より派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開している。西から今宿、早良、福岡、柏屋平野と呼ばれ、古くから地理的、歴史的に独自の環境を有している。

今回報告する東入部遺跡群の立地する早良平野は西側を脊振山系から北に派生する飯盛・長垂山塊に、東側を油山山塊によって区切られ、平野の中央部には室見川が博多湾へと北流する。平野には河口部を中心に洪積台地が点在し、北辺部には砂丘が形成されるが、その大部分は室見川を中心として金屑川、十郎川などの中小河川による沖積作用によって形成される。

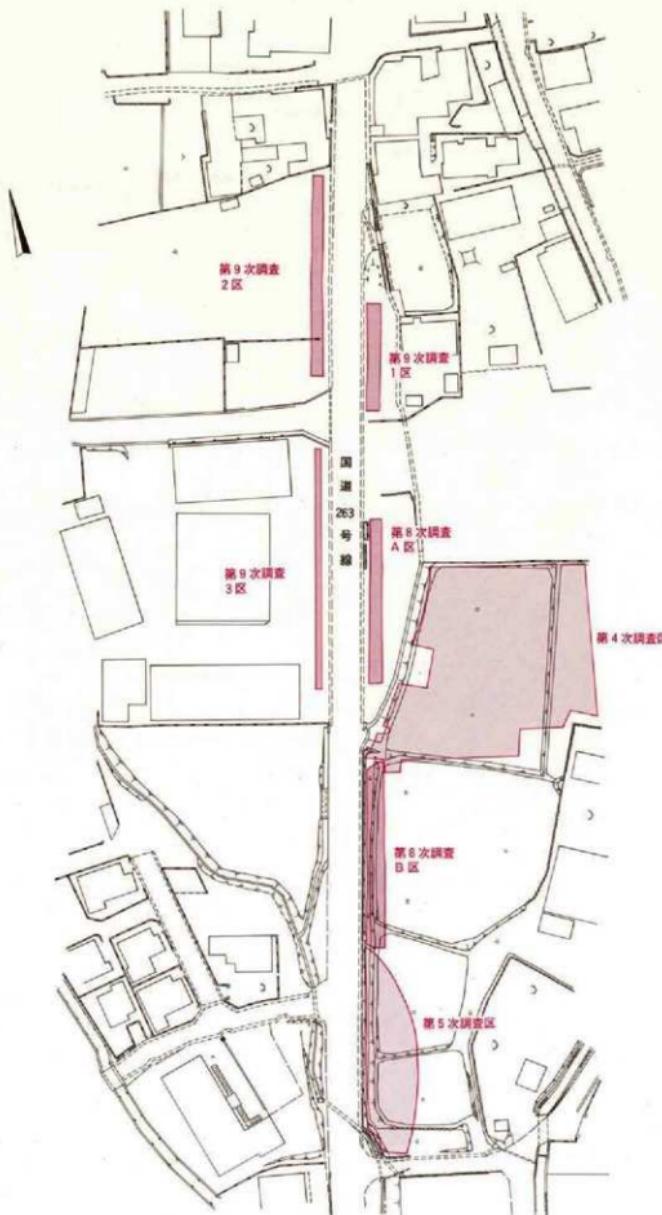
東入部遺跡群は平野南東部の荒平山西麓部からその西側の沖積地内に位置する。沖積地内には室見川に支流である貞島川の旧河道が數本存在し、その間に形成される微高地が北西方向に延びる。本遺跡群内ではこれまでに10次に及ぶ調査が実施され、歴史像が具体化しつつある。周辺遺跡の調査成果もふまえ、歴史的環境について述べることとする。縄文時代では重留遺跡において晚期の竪穴住居、墓地等から構成される集落が確認されている。また本遺跡においても晚期終末の墓地を検出している。また、後晩期の遺物は遺構に伴うものではないが、比較的散見される。弥生時代では前期の段階より、本遺跡群をはじめ重留遺跡、岩本遺跡、四箇船石遺跡で竪穴住居、墓地が確認されている。中期においても集落の継続が認められ、本遺跡群、岩本遺跡では掘立柱建物の出現をみることができる。また本遺跡群、四箇船石遺跡では前期後半から後期初頭にかかる墓地群が形成される。本遺跡群の第2次調査においては青銅器、鉄器等の副葬品を有する木棺墓、甕棺墓が検出され、該期の平野内における社会構造を考察する上で重要である。岩本遺跡では集落の展開する微高地間の低地に中期の水田遺構が確認されている。中期後半から後期初頭にかけては集落規模が縮小し、住居の分布も偏在する。一部断絶を経て、古墳時代に入ると前代を踏襲し、各遺跡内で集落が形成される。墳墓では重留遺跡において前期の方形周溝墓群が検出されている。また、同遺跡内では5世紀代の前方後円墳である拌塚古墳があり、平野内の首長墓の系譜上に位置づけられる。本遺跡群内にも4世紀から6世紀末にかけての円墳がみられる。古代では今回報告する調査地に隣接する第4次調査において官衙的色彩の強い大型建物群が製鉄関連遺構とともに確認されている。本遺跡群を中心に製鉄関連の遺構が該期以降急速に増加することは上述の施設設置が契機となった可能性が高い。古代末から中世にかけては広範囲に集落が形成される。清末遺跡では大型建物が12世紀代に造営され、該地での水田開発及び周辺集落形成の拠点的役割を担ったものと考えられる。

参考文献

- 『入部 I』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集) 福岡市教育委員会 1990
- 『入部 II』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集) 福岡市教育委員会 1991
- 『入部 III』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集) 福岡市教育委員会 1992
- 『入部 IV』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集) 福岡市教育委員会 1993
- 『岩本遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第342集) 福岡市教育委員会 1993
- 『東入部遺跡群』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集) 福岡市教育委員会 1994



第1図 周辺遺跡分布図(1/10,000)



第2図 調査区位置図(1/1,000)

III. 第8次調査の記録

1. 調査概要

第8次調査区は東入部遺跡群の東端部に位置する。国道263号線の東側に沿う狭長な調査区で、第4・5次調査区に隣接する。調査対象地の東側には既存施設が存在するため国道への生活道路確保の目的で該地に10数mの空闊地を設けた。そのため調査は2調査区で実施し、北側をA区、南側をB区と呼称した。調査前はA区は宅地、B区は耕作地であった。調査面積はA区87.4m²、B区131m²、計218.4m²である。

1993年11月4日から重機による表土剥ぎ、排土搬出を行なった。9日より作業員を投入し、△区・B区北側の調査を開始した。B区は打って返しの調査のため、記録作成後の20日に排土を反転し、22日より南側の調査を実施した。調査終了後26日に器材を撤収し、全作業を完了した。

今回の調査地は荒平山(標高約395m)西麓の緩斜面端部付近に位置する。遺構は黄褐色土上面で確認し、△区では河川・土坑・ピット、B区では掘立柱建物・堅穴住居・土坑・ピット群を検出した。時期は弥生時代、古代、中世に大別される。調査時の遺構番号は3桁の通し番号とし、A区は001から、B区は051から付けた。番号は欠番があるものの、重複はない。以下の報告においては例言に記した遺構略号と原則的に調査時の遺構番号とを組合せ記述する。

2. 層序

まず、A区西壁上層(第3図)での1層群は表土、客土、攪乱である。2~4層群は水平堆積を呈し、宅地造成前の耕作層と考えられる。「3.-2)河川」で後述するが6~18層はSR001の、19~24層はSR002の覆土である。25~28層は遺構面が西側に傾斜する皿状の窪地に堆積した層で、SR002はこの上面より切り込む。なお5層群は河川埋没後の上面より掘り込まれた遺構と考えられるが、10層中位まで重機による剥ぎ取りを行なったため、平面プラン等の確認はできなかった。遺構面である29層は粗砂粒を含む黄褐色粘質土で、B区7層及び第4次調査での2面目の遺構面である7層に連なると考えられる。またA区では第4次調査での1面目の遺構面である6層は確認されず、これは6層が西側に向かって薄くなるという第4次調査の所見と照合すると両調査区の境界付近で消滅するものとみられる。

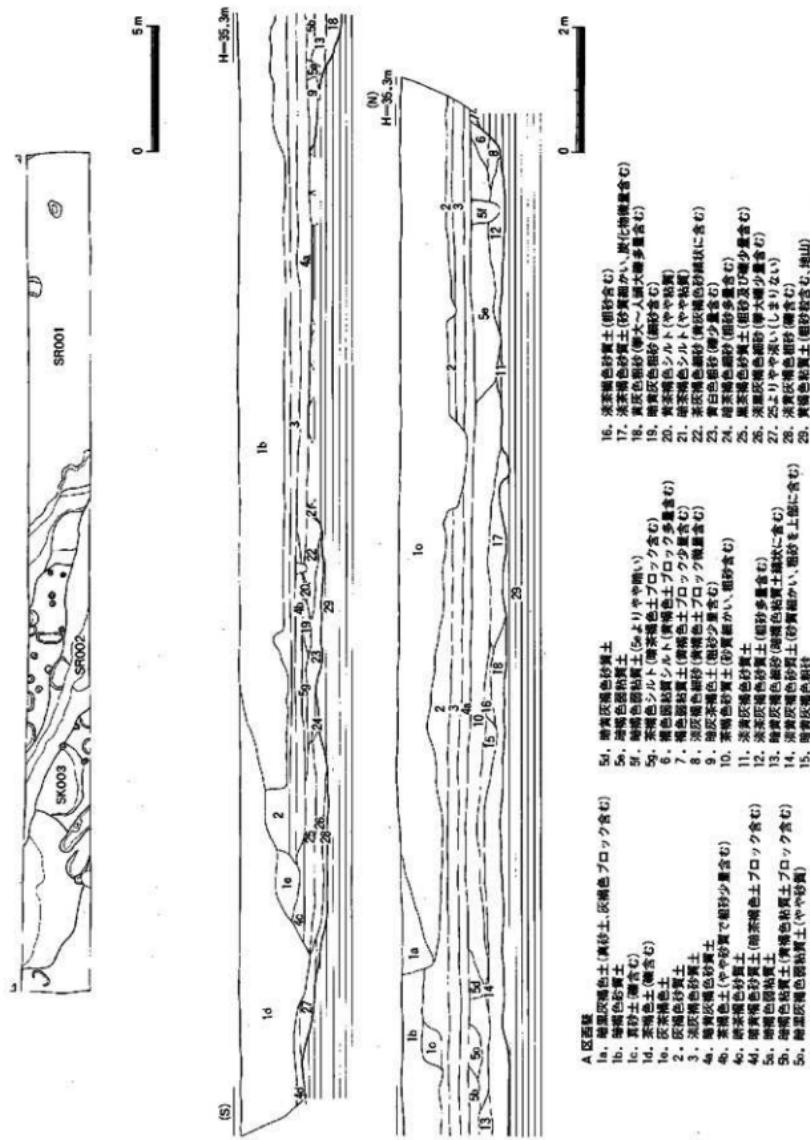
B区東壁土層(第4図)での1層群、2層は現表土、耕土、床上である。両層の南側層界部分には鉄分の沈殿が認められた。その下位には3層が薄く水平に堆積する。北端部では北側で傾斜する5層の上面に4層が堆積する。5層は遺構検出を行なった7層に沿う様に堆積しており、上向は略水平である。また北端では5層、7層間に6層が認められた。この層は前述した第4次調査の6層に該当すると考えられる。7層は第4次調査の7層に該当し、今回の調査では時間的制約からこの7層上面まで重機による剥ぎ取りを行なった。ただし、実際の遺構検出は遺構の重複が著しいために7層上面より5~10cm程度下げて行なった。この層はやや砂質がかった黄褐色土で、北側に向かって緩く傾斜を有する。標高は南端で36.0m、北端で35.2mを測る。

第4次調査区、B区及び南接する第5次調査区は北西方向に傾斜する山麓緩斜面上に位置しており、A区付近で沖積層へと移行するものと考えられる。

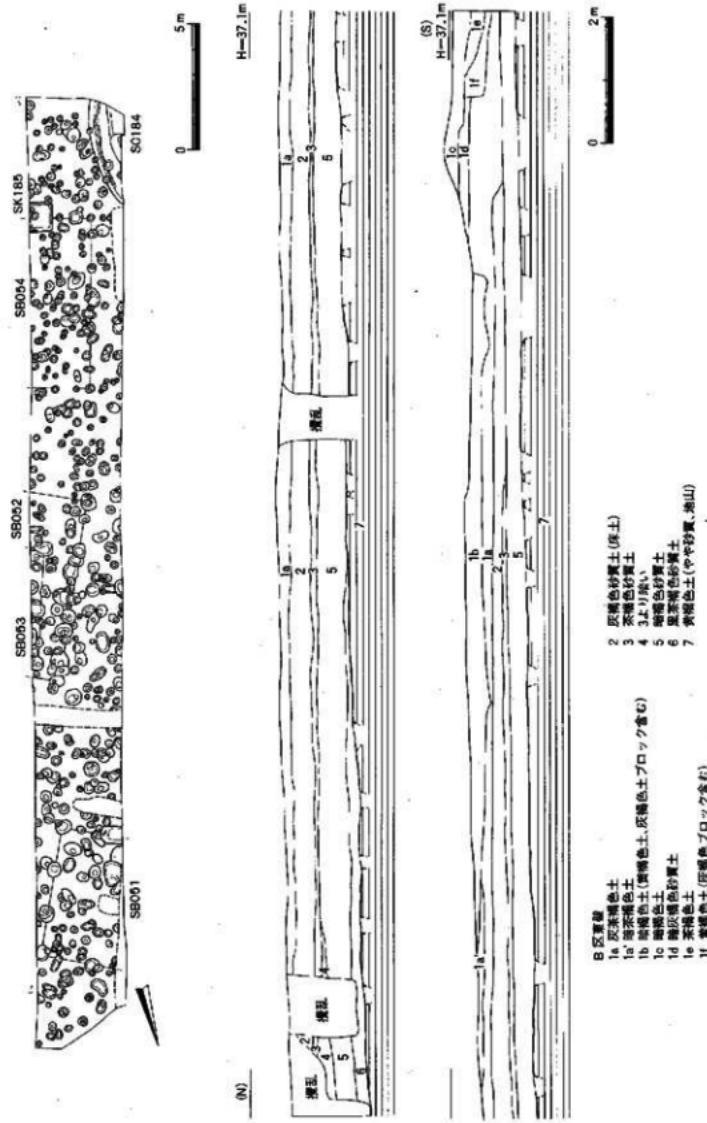
3. 遺構と遺物

1) 掘立柱建物

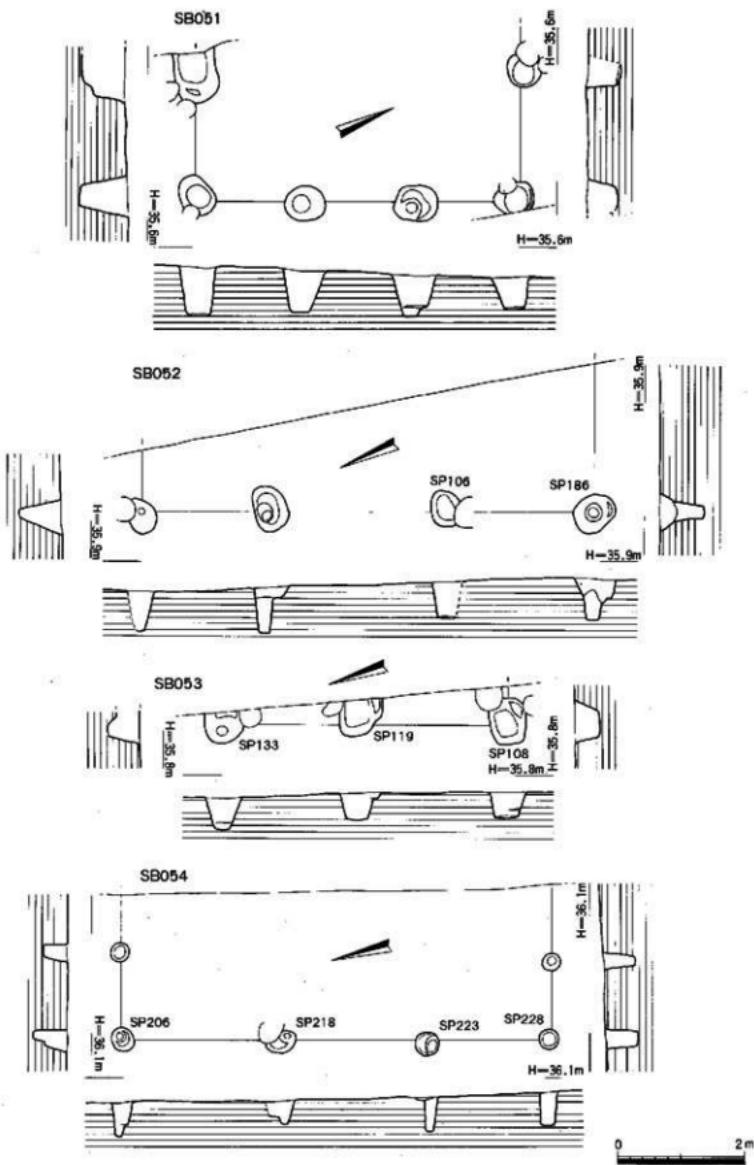
ピットの検出状況はA区では疎らでシミ状の浅いものが大半である。B区では北接する第4次調査第2面の南西部でみられたように分布密度が濃く重複も著しい。覆土は黒(茶)褐色土、暗灰褐色土に



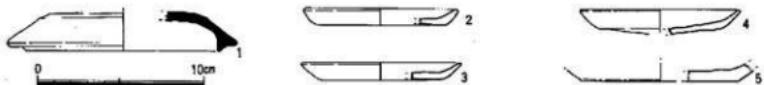
第3図 東入部遺跡群第8次A区造構配図(1/200)、西壁土層実測図(1/80)



第4図 東入部遺跡群第8次B区造構配置図(1/200)、東壁土層実測図(1/80)



第5図 SB051-052-053-054実測図(1/80)



第6図 SB053-054出土遺物実測図(1/3)

大別され、出土遺物と対比すると前者は弥生時代・古代、後者には古い遺物も含まれるが、中世前半期の遺物が認められた。前者が量的には多く、後者はB区南側に分布が偏る。以下に報告する4棟の掘立柱建物のうち調査時に復元できたものはSB051のみで、他の3棟は図上復元による。調査区が狭長であるため建物の全容を明らかにできたものではなく、またまとめきれなかったピットも多いと思われる。

SB051(第5図) B区北側に位置し、西側が調査区外に延びる。南北の柱筋を桁方向と想定すると主軸方位をN-24°-Eにとる2間以上×3間の建物である。桁行は全長5.1m、柱間は1.7mを測る。梁間の柱間は2.1mである。柱穴は円形を主体とし、径60-80cm、深さ50-75cmを測る。覆土は黒褐色土を呈する。各柱穴からの出土遺物はない。

SB052(第5図) B区中央に位置する。南北の柱筋を桁方向と想定すると、SB051同様にN-24°-Eに主軸を有する1間以上×3間の建物と考えられる。なお、梁方向は不明(図上では東側に延びる建物としている)である。桁行は全長7.2m、柱間は北側から2.1m、2.7m、2.4m不揃いである。柱穴は円形または楕円形を呈し、径60-75cm、深さ55-70cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とする。SP106-186から弥生土器・須恵器壺の細片が出土した。

SB053(第5図) SB052東側の調査区間に位置する。比較的規模の大きな掘り方が略一定の間隔で南北方向に並ぶことと、これらの方向が、「V.結語」で後述するが、第4次調査で確認された建物群の一部の主軸方向と一致することから、可能性をもつものとして復元した。この柱列は2間以上と推定され方位はN-18°-Eである。建物の大半は調査区東側に延びると推定される。現存の全長は4.5mで、柱間は北側が2.2m、南側が2.3mである。柱穴は隅丸方形を呈すると考えられ、深さは40-50cmを測る。覆土は淡黒褐色土を主体とする。

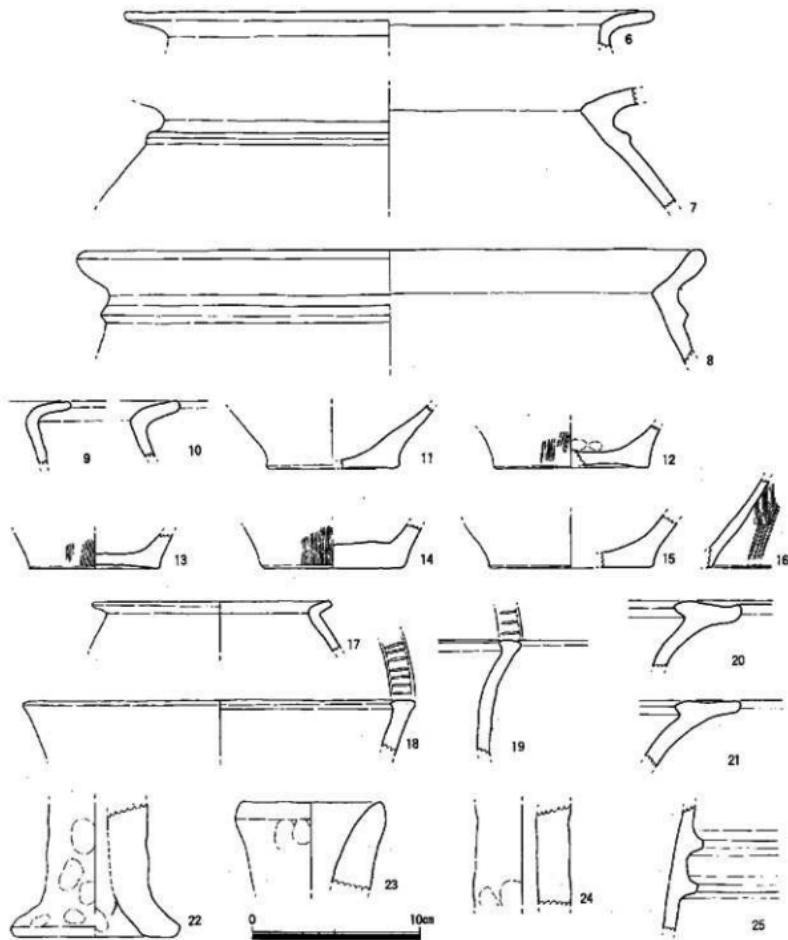
出土遺物(第6図1) SP119から出土した須恵器の壺蓋で復元口径11.4cmを測る。短い外反気味のかえりを有する。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデである。他に弥生土器の細片が2点出土した。また、SP108-133から弥生土器・土師器の細片が少量出土している。

SB054(第5図) B区南側に位置する1間以上×3間の建物である。主軸方位をN-14°-Eにとる。桁行は全長6.9m、柱間は北側から2.7m、2.4m、1.8mで、梁方向の柱間は北側が1.3m、南側が1.2mである。柱穴は円形で、径30-40cm、深さ40-55cmを測る。覆土は前3者と異なり、暗灰褐色土を呈する。

出土遺物(第6図2~5) 2~4はSP228から出土した土師器小皿である。2・3は共に器高1.0cm、復元口径はそれぞれ9.0、9.4cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。4は復元口径9.4cmで、外底部は回転ヘラ切りである。5はSP223から出土した土師器壺で復元底径9.4cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。他にこの2柱穴及びSP206-218から弥生土器・土師器・須恵器・瓦器の細片が出土した。

2) 河川

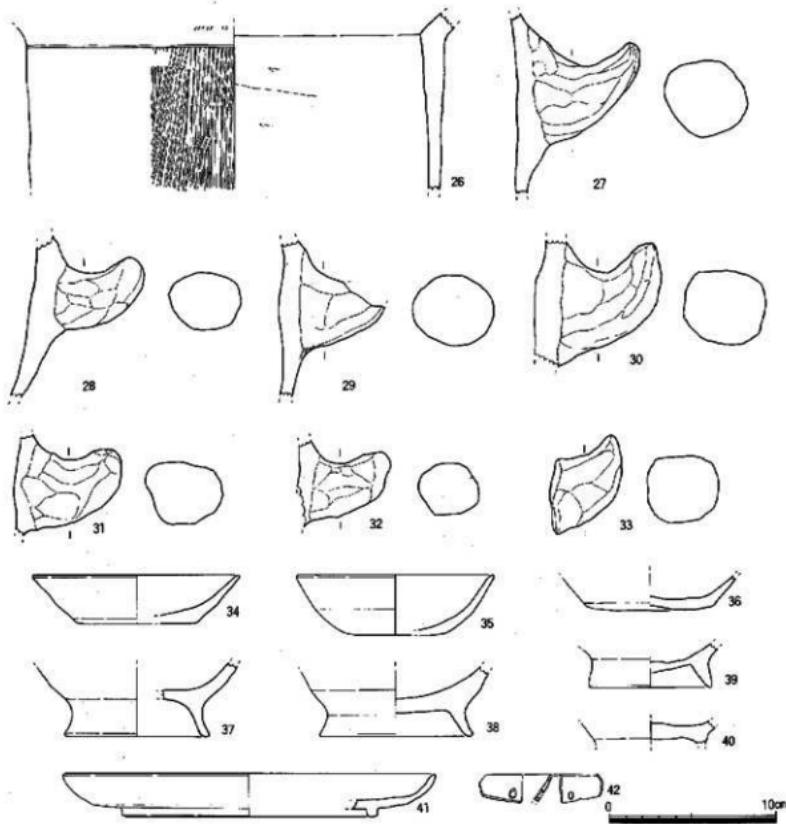
SR001(第3図) A区の北半部を占め、南東部はSR002に切られる。西壁土層観察で北端部において立ち上がりを確認した。幅約18m、深さは造構面より最深部で55cmを測る。この造構は第4次調査区の南東から北西に流路をとる河川の延長と推定される。荒平山麓を浅く開拓し、室見川の支流であ



第7図 SR001出土遺物実測図(1)(1/3)

る貞島川へと注いでいた小河川であったとみられる。沖積地内へと移行するA区付近で幅員が拡大する。下層部では砂礫の堆積が顕著である。調査に際しては「2.層序」で述べた様に10層中位までを重機によって除去後、人力掘削を行なった。なお、遺物は18層を主とする粗砂層上面までを上層遺物として、以下を下層遺物として取り上げたが、時期差を示すような有効な結果は得られなかった。

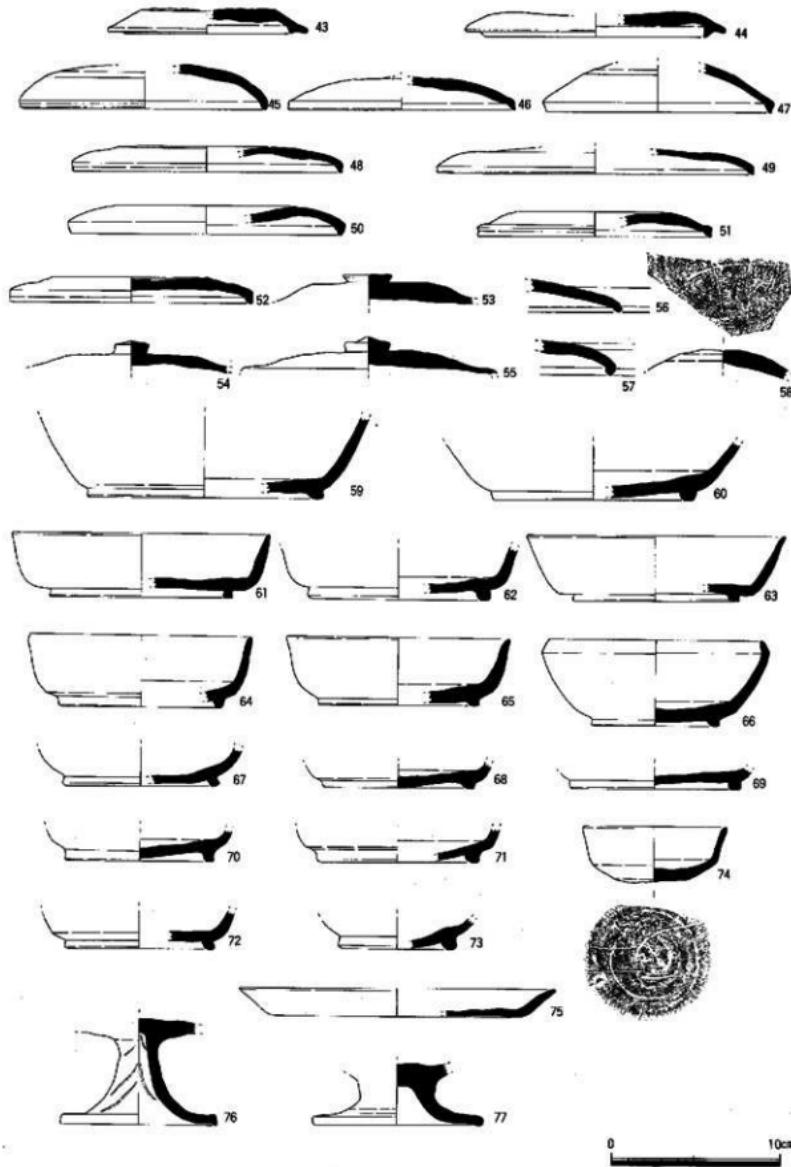
出土遺物(第7~10図) 弥生時代中期の土器、古代の土師器・須恵器等が出土した。以下種別に報告を行なう。第7図は弥生土器である。6~10は甌の口縁部である。内外面には横方向のナデが施さ



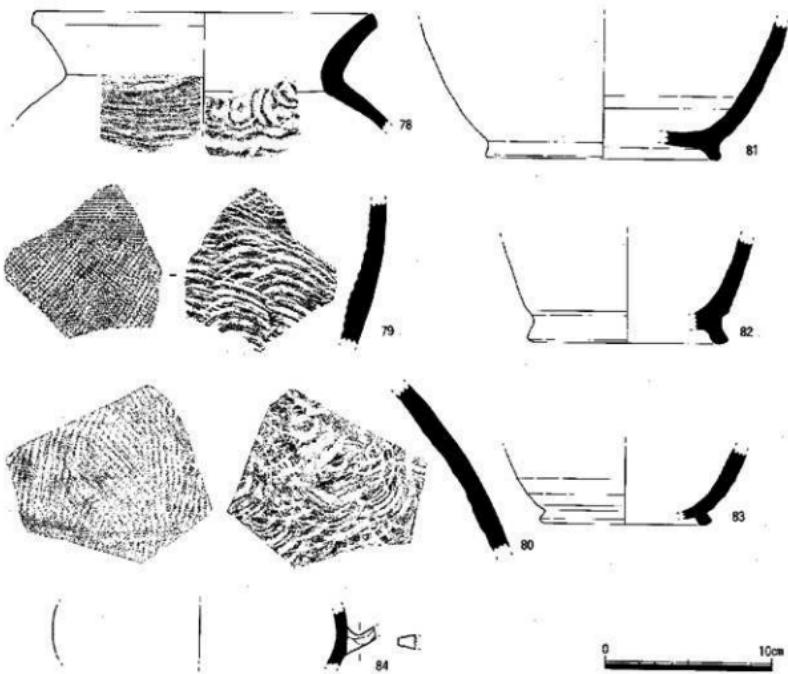
第8図 SR001出土遺物実測図(2)(1/3)

れる。6・9・10は内傾気味の逆「L」字状の、7・8は「く」字状の口縁部を有する。8はやや外湾気味に立ち上がる。11～16は壺底部である。外面には縱方向の刷毛目、内面にはナデもしくは指オサエを施す。12・13はやや上げ底状を呈する。17～21は壺口縁部である。17は復元口径15.0cmを測る無頸壺で内傾気味の逆「L」字状の口縁部を有する。18・19は直口壺で共に平坦な口縁部上面にヘラ状T工具による刻目をもつ。なお、刻目内には僅かに赤色顔料の塗布が認められた。なお、18は高坏の可能性もある。20・21は鋤形の口縁部を有する。22・24は器台で22・23の外側には指オサエがみられる。25は壺柄の胴部片と思われる。2条の「コ」字突帯を貼り付ける。

第8図は土師器である。26は壺で直線的な体部から「く」字状における口縁部を有する。外面は縱方向の刷毛目、体部内面は斜め上方向のヘラ削りを施し、口縁部との境界は棱をなす。外面の口縁部と体部の境付近には刷毛目と同一とおもわれる工具による浅い沈線が巡る。27～33は壺の把手である。



第9図 SR001出土遺物実測図(3)(1/3)



第10図 SR001出土遺物実測図(4)(1/3)

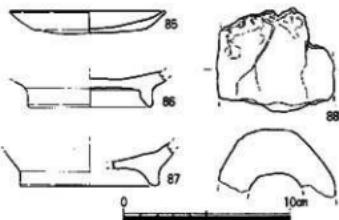
指オサエ、指ナデを施す。34~36は壺である。外面は崩滅が著しいが、内面にはヨコナデ、ナデが認められる。34の外底部には回転ヘラ切り痕が残る。36の底部は丸味をもつ。37~40は碗で40は高台の大半を欠失するが、他は外向する高い高台を貼り付ける。全体に崩滅するが、38・39の外底部には回転ヘラ切り痕が認められる。41は復元口径22.0cm、器高2.6cmを測る高台付盤である。丸味をもつ体部から口縁部が延びる。高台は断面方形である。外面の下半部は回転ヘラ削り、上半部はヨコナデ、内面には回転ヘラ磨きを加える。焼成は堅固である。42は口縁下に径4mmの孔を穿つ。

第9~10図は須恵器である。43~58は壺蓋で、観察可能な個体では天井部外面に回転ヘラ削り、天井部内面にナデ、他はヨコナデを施す。43~44は短いかえりを有するものである。45~52・56~57はかえりが消失し、口縁部を折り曲げるものである。53~55も同様の口縁部を有するものと思われる。口縁部の形態は鋭く折れ曲がるもののが大半を占め、鈍く折れ曲がる者(56)もみられる。つまみの遺存するものは少数である。中央部分が突出するもの(54~55)、扁平なもの(53)、扁平で中心部のみが突出するもの(52)がある。58は天井部にヘラ記号を有する。59~74は壺身である。59~73は断面方形の低い高台をもつ。体部が遺存するものでは、底径が大きく高台を底部端に貼り付けるもの(59~60)、高台が底部のやや内側に貼り付け、体部と底部との境界に丸味をもちらがら外方へ直線的に立ち上がるるもの(61~65)、外湾気味の体部で内側に屈曲する口縁部を有するもの(66)がある。74は高台のない小

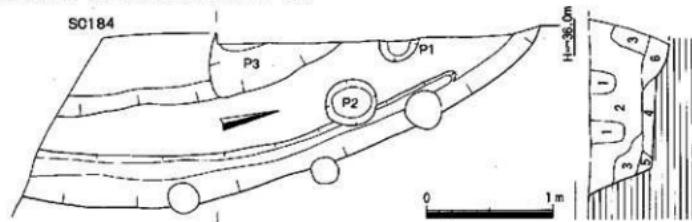
振りの身である。外底部に回転ヘラ切り痕を残し、ヘラ記号が認められる。75は復元口径18.6cmを測る皿である。外底部は回転ヘラ切り痕をナデ消している。76・77は高坏である。76は脚端部が屈曲し、内面にはシボリ痕が認められる。77は低脚で脚端部は丸味をもつ。色調は赤茶褐色を呈する。78~80は壺である。78の体部外面には平行叩き目、体部内面には同心円状當て具痕が残る。色調は明茶褐色を呈する。79・80は肩部片で、内面には同心円状當て具痕が残る。外面には79はカキ目、格子目叩き目、80はカキ目、疑似格子目叩き目がみられる。81~83は壺で、外向する高台を有する。83の体部外面に回転ヘラ削りを施す他はヨコナデである。84は扁平な角状の把手を有する。内外面はヨコナデ、把手の周囲はナデである。他に黒曜石剣片、鉄滓49.6kg出土した。

SR002(第3図) A区の中央を北東から南西に流れる路をとり、SR001を切る。深さは遺構面より約30cmである。シルト・砂が堆積する。

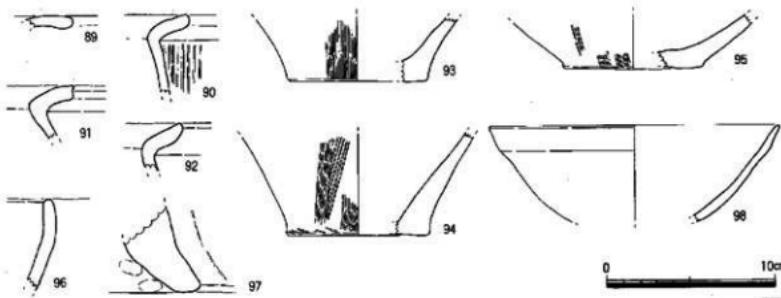
出土遺物(第11図) 85は口径9.1cm、器高1.4cmを測る完形の土師器小皿である。外底部は回転ヘラ切り痕を残す。内底部はナデ、他はヨコナデを施す。底面上で出土した。86~87は土師器碗で、直立する低い高台が貼り付けられる。共に磨滅する。88は鶴羽口の先端部付近である。外面の1/2は2次的な加熱により淡灰色に変色する。他に弥生土器、土師器、須恵器の細片、少量の鉄滓が出土している。



第11図 SR002出土遺物実測図(1/3)



第12図 SC184実測図(1/40)

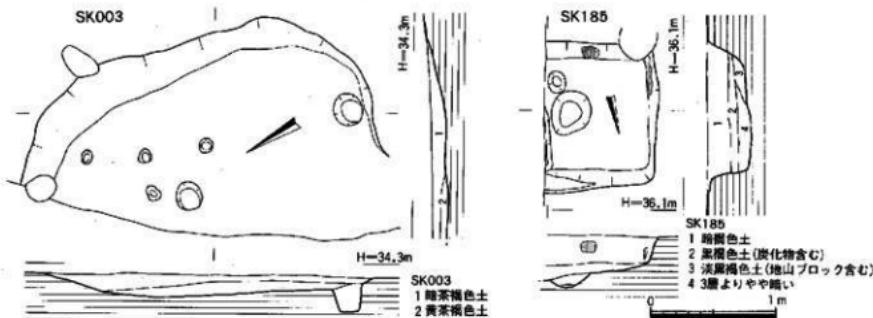


第13図 SC184遺物実測図(1/3)

3) 穴住居

SC184(第12図) B区の南西端に位置する円形穴住居で、大半が調査区西側に延びる。この住居は南接する第5次調査区で確認されたSC06の北側部分である。径は復元で約9.0mと大型である。壁に沿って深さ5~10cmの壁溝が巡る。また、その壁溝に沿うように幅40~50cm、高さ10cmの盛土によるベッド状遺構(4層部分)が確認された。この4層は掘削した地山土を盛ったものと考えられ、ブロックが混入する。また、住居内にはP1~3の掘り込みがある。P1はベッド状遺構の上面から掘り込まれ、深さは20cmを測る。P2は壁溝を切り、ベッド状遺構の上面から掘り込まれる。深さは15cmを測り、覆土には炭化物が混じる。P3はベッド状遺構に沿うような土坑状の掘り込みで、深さは20cmである。なお、ベッド状遺構を除去後の住居掘り方の底面は平坦である。

出土遺物(第13図) 89~97は弥生土器、98は瓦器である。89~92は壺口縁部である。89は逆「L」字状の口縁で、内外面に赤色顔料を塗布する。90~92は内傾した逆「L」字状口縁である。口縁部の内外面は横方向のナデ、90の胴部外面には縱方向の刷毛目が施される。93~94は壺底部で、共に外面は刷毛目、内面はナデである。95は壺の底部と思われる。細かい刷毛目が残る。96は鉢の口縁部である。内外面共に横方向のナデを施す。97は器台の脚部で、指オサエが残る。98は瓦器碗で口縁下に肥厚する屈曲部を有する。その上位はヨコナデによって緩い凹面となる。口縁部外面は黒褐色、他は灰白色を呈する。土層図に示したように住居覆土の上面より切り込むピットに検出漏れがあるため、98はそれらの遺構に帰属するものと思われる。他に弥生土器の細片が少量ある。また、第5次調査SC06では弥生土器の他に石錐、鉄製品が出土している。



第14図 SK003-185実測図(1/40)

4) 土坑

SK003(第14図) A区南側に位置する。西側をSR002に切られる。断面は浅皿状で、人為的な掘り込みであるとは判断し難い。遺構面が北西に傾斜する緩斜面上の凹部である可能性が高い。また図示したピットはシミ状の浅いものが大半である。

出土遺物(第15図99) 土器器碗で、外向する高い高台を有する。内外面は磨滅が著しい。他に土器・須恵器の細片、鉄滓が1点出土した。

SK185(第14図) B区南側に位置し、東側は調査区外に延びる。方形の土坑で幅1.2m、深さ30cm



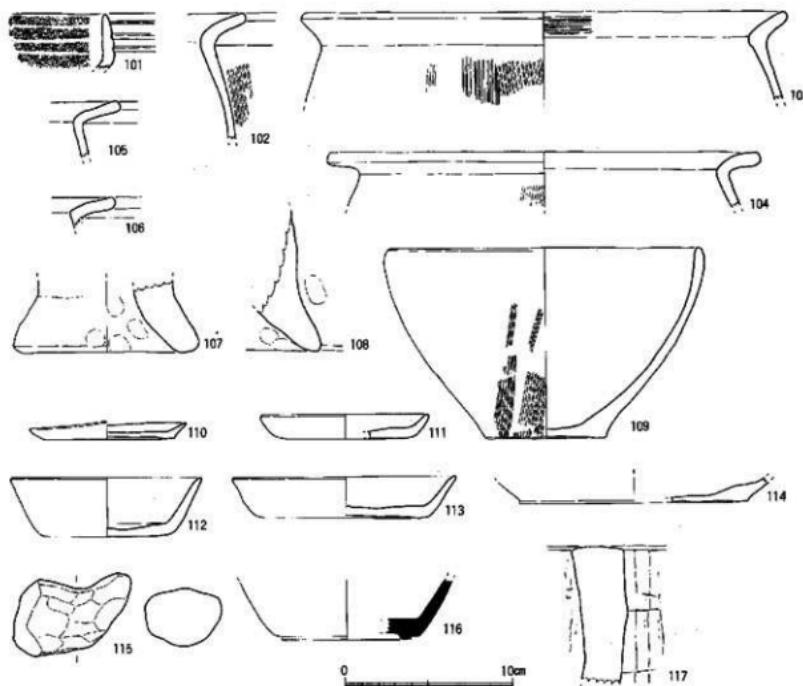
を測る。床面には浅いピット状の掘り込みが認められた。西及び南側壁面の一部が焼ける。

出土遺物(第15図100) 弥生土器の甕で、やや内傾する逆「L」字状の口縁部片である。外面に横方向のナデが僅かに残る程度で、他は磨滅する。他に弥生土器・土師器の細片が少量出土した。

5) その他の遺構と遺物(第16図)

ここではピット出土及び遺構検出時に採集した遺物をとりまとめて報告する。101は縄文土器の深鉢である。内傾気味の口縁部外面には3条の沈線が巡る。砂粒を多量に含む。102~109は弥生土器である。102~106は甕で、102・103は内面に緩い棱をもつ「く」字状口縁、104~106は内傾する逆「L」字状口縁である。103の口縁部内面は刷毛目を粗くナデ消す。107・108は器台の脚部である。109は鉢で、口縁部はやや内傾する。外面は縱方向の刷毛目、内面はナデを施す。110~115は土師器である。110・111は外底部回転糸切りの小皿で、口縁部内外はヨコナデ、内底部はナデを施す。111には板状压痕が認められる。112~114は壺である。外底部は112・113が回転ヘラ切り、114は回転糸切りである。115は瓶の把手で、指オサエによる凹凸がみられる。116は須恵器の坏身で、極低い高台を貼り付ける。117は滑石製石鍋で、外面にはノミによる削痕が認められる。

出土位置は115がA区検出面、その他はB区出土である。このうち101・102・106・111は検出面、他はピット出土である。なお110・114、103・108はそれぞれ同一遺構の出土である。



第16図 ピット・遺構検出面出土遺物実測図(1/3)

IV. 第9次調査の記録

1. 調査の概要

第9次調査は東入部遺跡群の東端部に位置する。国道263号線の両側に沿う狭長な調査区で、第8次調査区を北に延長した部分である。道路の東側を1区、西側を2区とした。調査対象地は国道に接し地表面から遺構面までの深さが1m以上あるため、安全性を考えると引きをとらざるを得ず、3m前後の狭いトレンチ状の調査区となった。交通量が多いことも重なり、調査を行いにくく、また困難がともなうものであった。

1995年5月25日から重機による表土剥ぎ、排土搬出を行った。調査は排土置き場の関係から1区、2区ともに南半から行い、反転して北半を行った。24日より作業員を投入し、埋め戻しまでの調査が終えたのは6月25日である。

調査は1区、2区とも基盤である黄褐色土層まで重機で下げ、後は人力で行った。1区は調査区のほとんどが河川堆積であるが、両端にわずかに基盤土が現れたため河川の規模が確認できた。これがなければ河川床まで重機で掘削していたところである。河川中には堆積上の流れから数本の流れが見られるようであったが、はっきりとしたプランはつかめなかった。しかし南半と北半で流れが異なる様だったので便宜的にSR001、005にわけて遺物のとり上げをおこなった。また、SR002はSR005の状面で検出した明確にプランが追える流路である。黄褐色の基盤土上では茶褐色土を覆土とするピット、土坑を検出した。2区では調査区の2/3に黄褐色土がひろがる。VI層まで重機で掻げたためSR012を掘りすぎる結果となった。黄褐色土面には砂質の茶褐色土を覆土とする5から10センチ大の浅い穴を多数検出した。牛等の足跡と思われる。南半の河川堆積の上面でも同様の小穴が多数検出できたが、小振りで一連のものかは不明である。南半は河川堆積である。上層の1から4層はやや粘質の土で下層の砂層と区別できる。上層をSR015、下層をSR016としたが埋没段階の違いによる可能性が高い。黄褐色土上面では土坑の他にピットも検出したが有機的関連は確認できなかった。

2. 層序

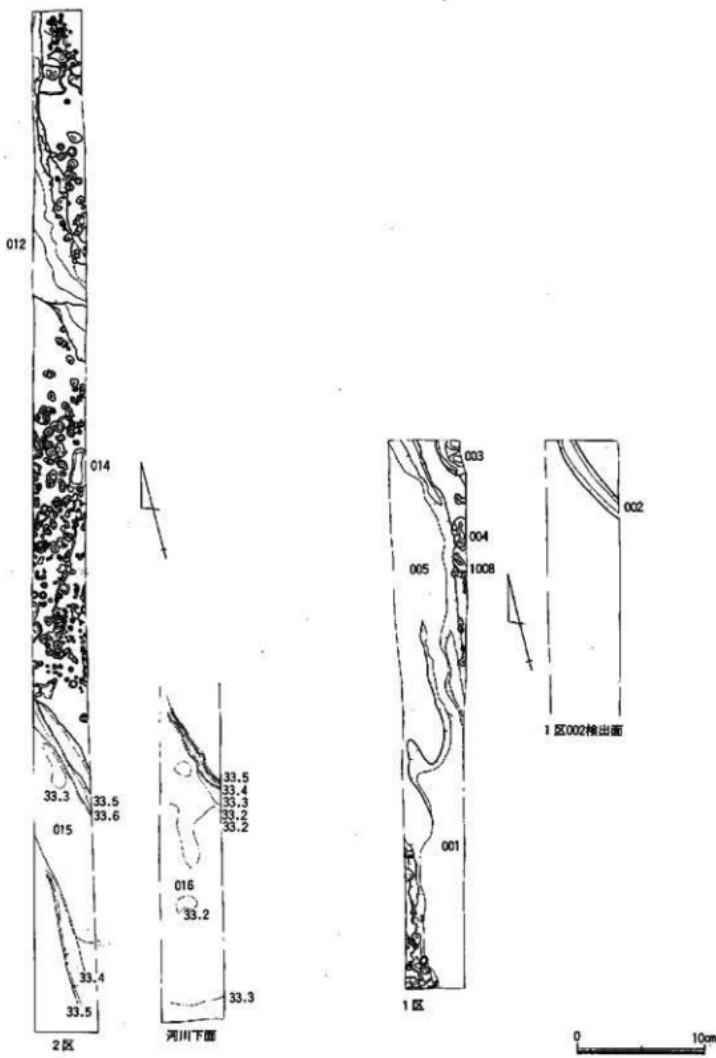
1区、2区とも基本的に同様の堆積を示す。1層は真砂土の客土で40から60cm盛っている。解体した家の建築の際のものと思われる。2層は耕作土である。1区では上面が水平堆積、2区でも北半は畠状の高まりを除いて同様である。2区の南半では畠の畠状の高まりが観察される。IV層に水田床土がみられ、II層は水田耕作土と考えられるが、客土が行われた時点では畠作が行われている。III層は1区の北半にのみ広がる灰色の層群である。水田築造時の埋め土とも考えられよう。VからVII層は主に2区に広がる茶色の砂質土である。SR012はこれらの層を切る。これらの層は重機で掘削したため伴う遺物も確認できおらず堆積時期は不明である。基盤の黄褐色土上面は第4次調査の下面検出面にあたるものと考えられる。4次で古代の遺構を検出した暗褐色土層は確認できなかった。

また、調査直後8次調査地点の道を挟んで内側で下水道工事の際に立会を行った。砂礫層が上がってきており9次で見られた河川等は確認できなかった。この地点は9次調査の3区として図示しておく。(第2図)

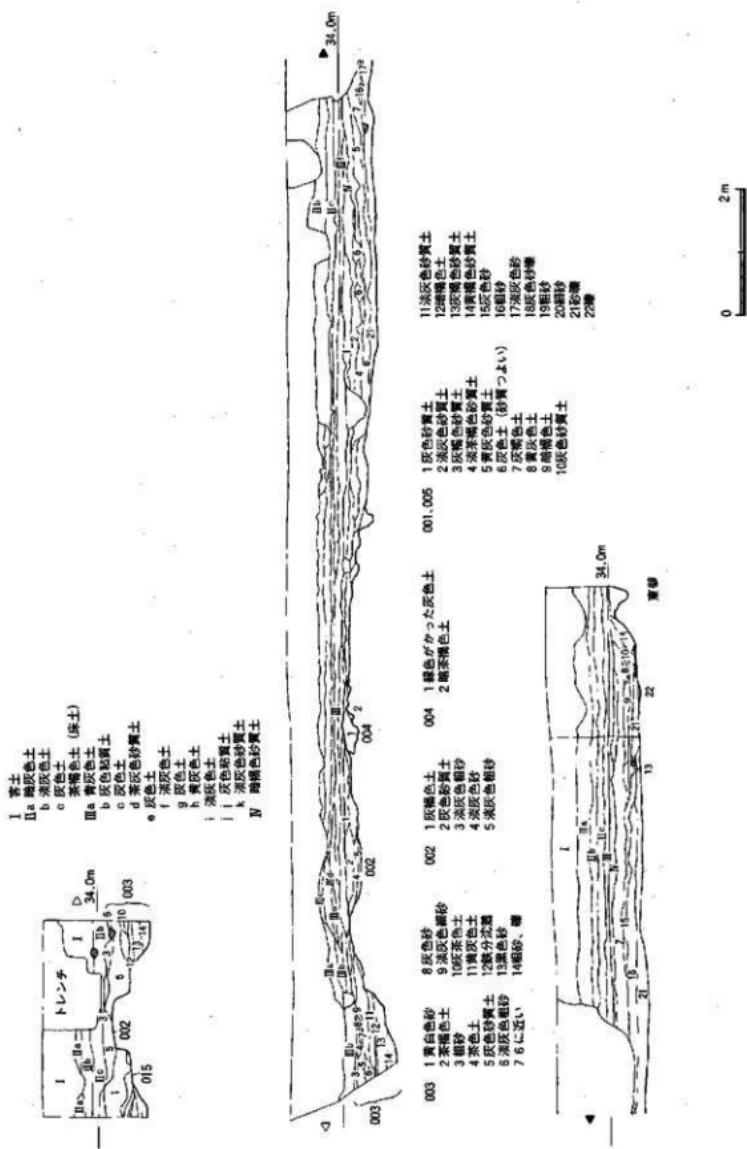
3. 遺構と遺物

1) 河川

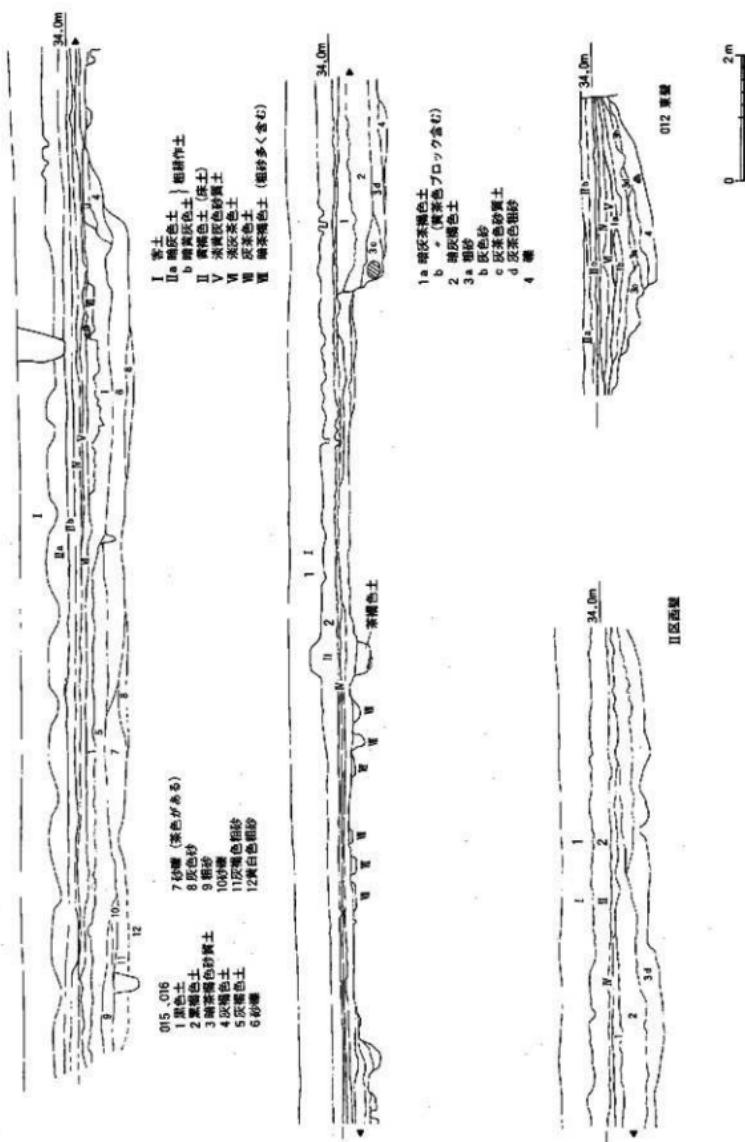
1区の001、005と012は同様の方向に走り、同じ河川の可能性がある。先述したようにSR001と



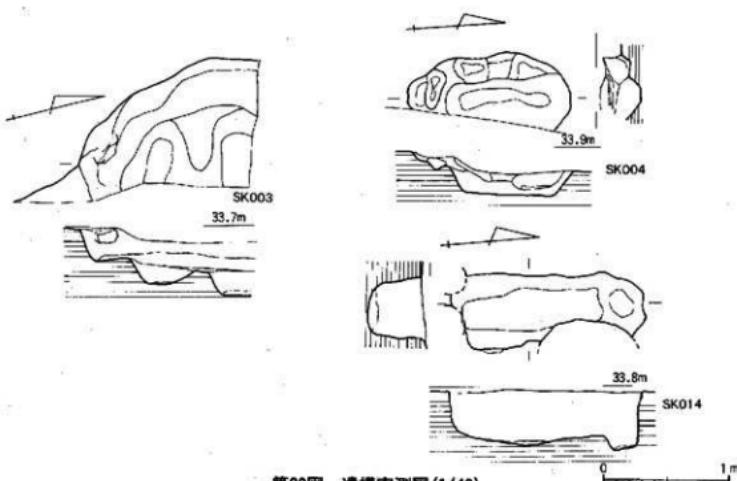
第17図 東入部遺跡群第9次発掘配置図(1/200)



第18図 1区土層実測図(1/4)



第19図 2区土層実測図 (1/40)



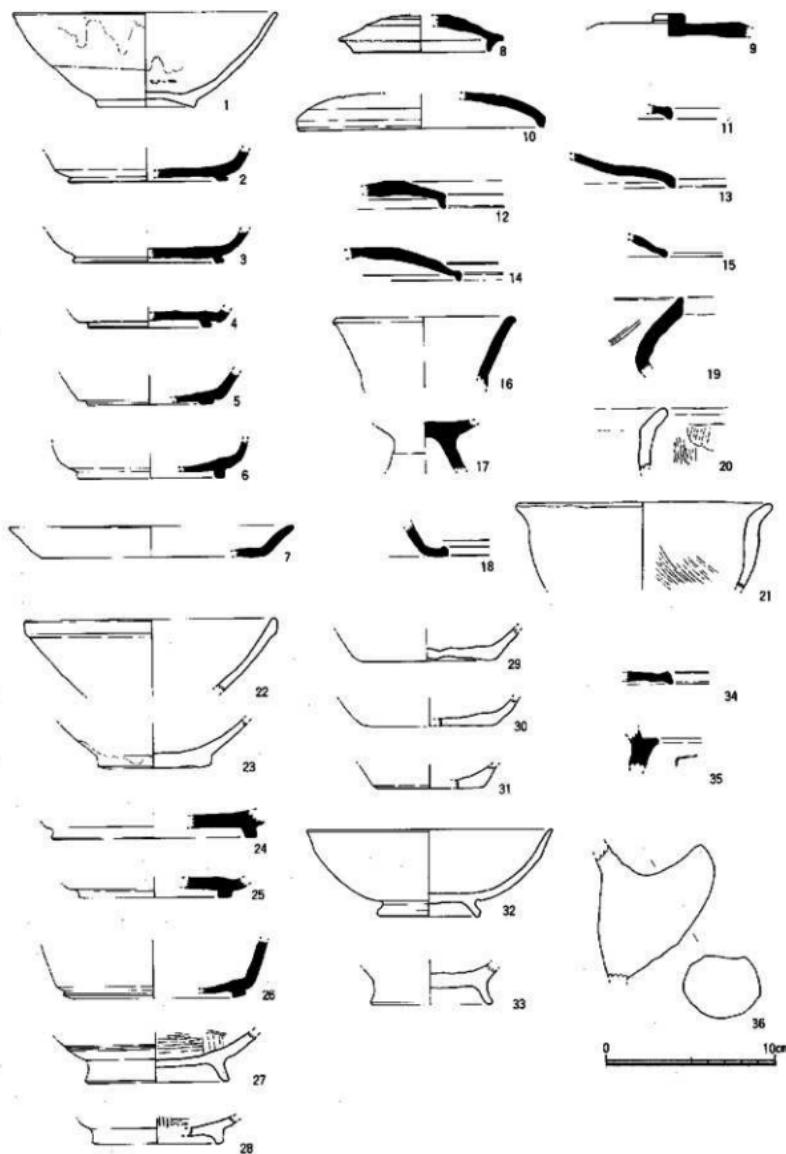
第20図 遺構実測図(1/40)

SR005と分離できないかと考えたができなかった。可能性は残しておきたい。2区南側のSR015、016は規模、時期とも未知のものである。

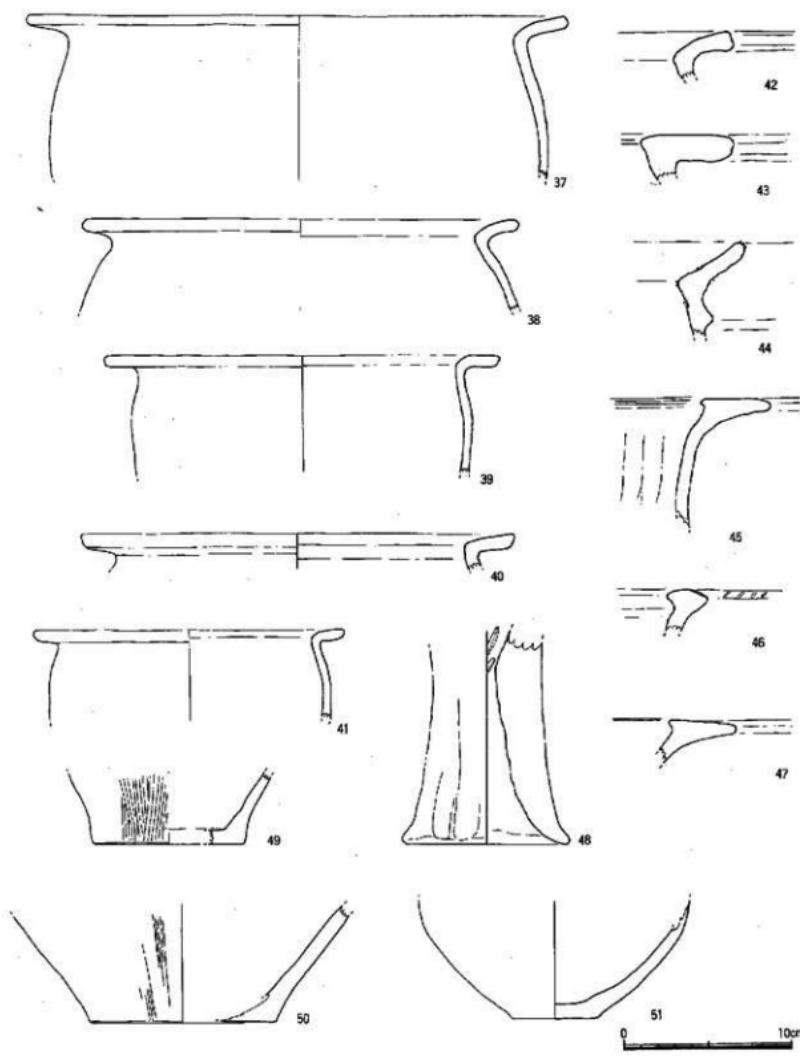
SR001 墓土の上部は砂質の強い灰色土、下部は砂礫からなる。床は固くしまった砂礫層である。調査区南壁から15m付近にくぼみが見られる。遺物はコンテナ1箱で陶磁器、須恵器、土師器、鉄滓が出土したが量的には弥生土器が最も多い。1は越州窯青磁で灰緑色の釉を施す。細かい貫入が見られる。底部は円盤状を呈し上げ底である。外部下部は露体で淡い茶色がかった灰色を呈す。内面には目跡が残る。床面から出土した。2から19は須恵器である。最終的な時期を表すものではないと思われる。2から6は高台付杯である。外面底は4は箆切り痕をそのまま残し、3はなでているもの一部残る。他は丁寧になで消す。7は皿である。8から15は蓋である。16は壺の口縁部で回転なで調整が明瞭に残る。19は壺の口縁部である。19は高壺で焼きがあまく器壁内部は生焼けで茶色を呈す。18は高壺の脚と思われる。20、21は土師器の壺で20は外面上に刷毛目が明瞭に残り、内面には炭化物が付着する。21は胎土が細かく丁寧になでて仕上げている。これらその他に玉縁口縁の白磁碗片32に類似した土師器の椀が最上層から出土している。また、土師皿片も見られるが細片である。弥生土器は後でふれる。

SR005 右岸に寄って1m幅ほどで川底状にくぼみ、鉄分が沈着する。遺物はSR001より新しい遺物が見られるが、量的には弥生土器に次いで須恵器が多く、001との時期差を決めるは心許ない。コンテナ2箱が出土した。22、23は白磁碗で同一個体と思われる。粗に貫入があり、下部に気泡が目立つ。24から26は須恵器の高台付き杯7、34は蓋、35は硯である。27、28は黒色土器Aで27の底部には板目圧痕が残る。29から31は土師器の皿で器面は粗れている。32は土師器の椀で砂粒を含まない精良な胎土で内外面とも研摩調整を施す。体部も1/3残存し、残りの好い方である33は土師器の椀で砂粒を多く含む。36は瓶の取手である。

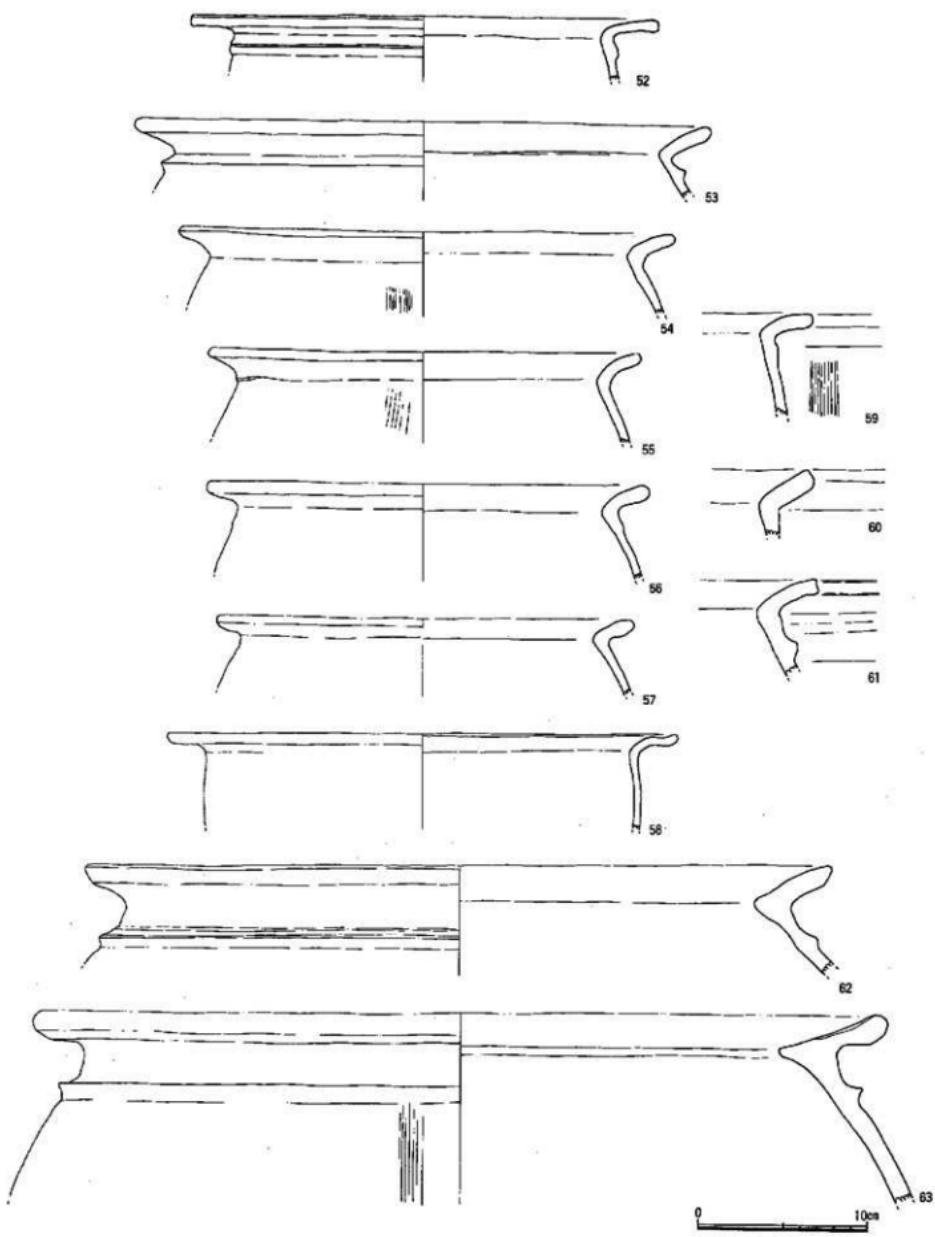
37から51はSR001、005出土の弥生土器である。中期の中ごろを主体としており、4次調査の遺構と同じ時期を示す。37から41は壺の口縁部である。42から44は大型になる。44から47は壺で46には刻



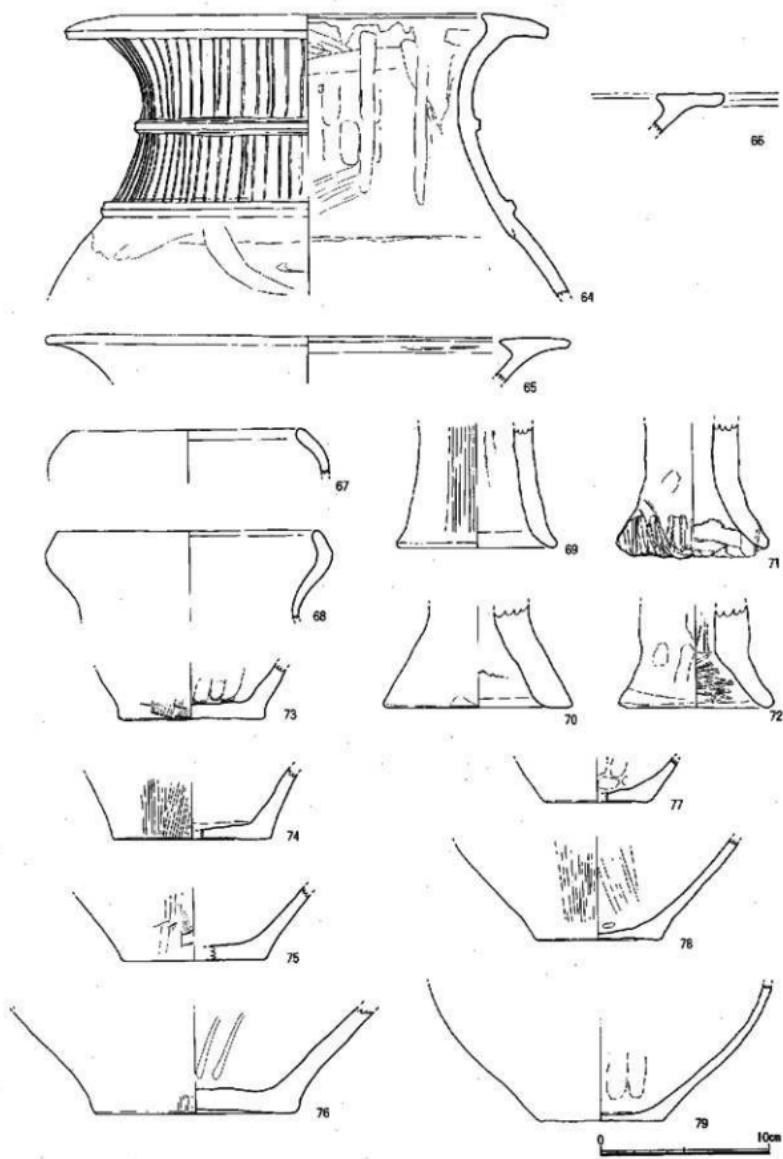
第21図 SR001-005出土遺物実測図(1)(1/3)



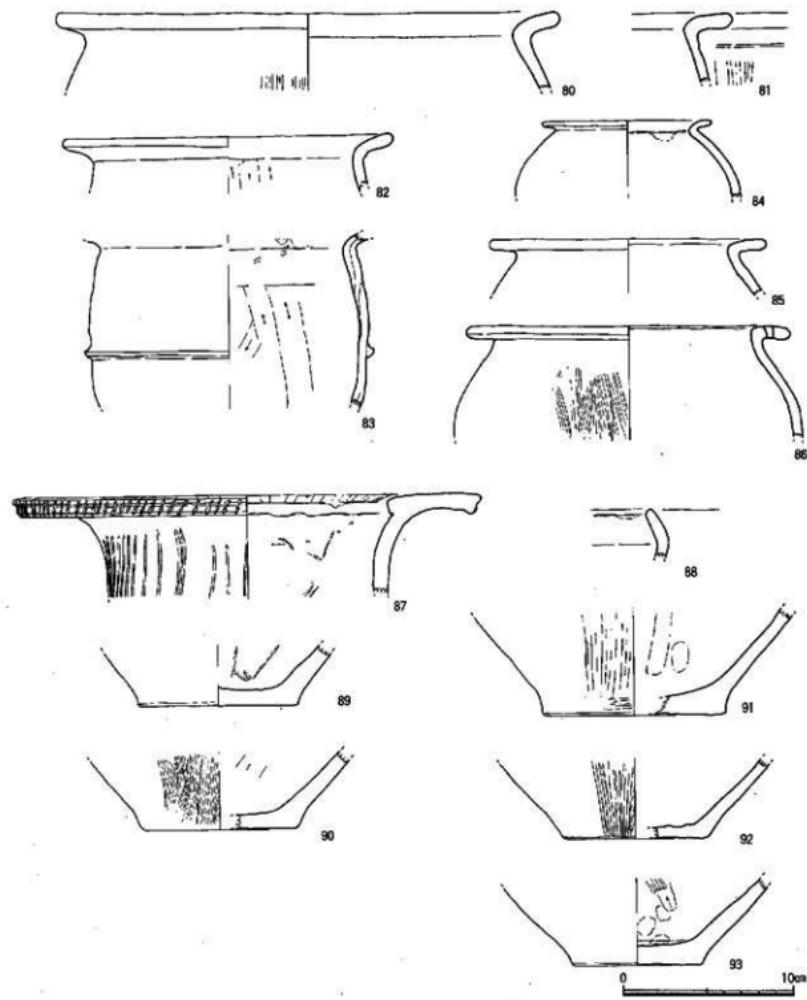
第22図 SR001-005出土遺物実測図(2)(1/3)



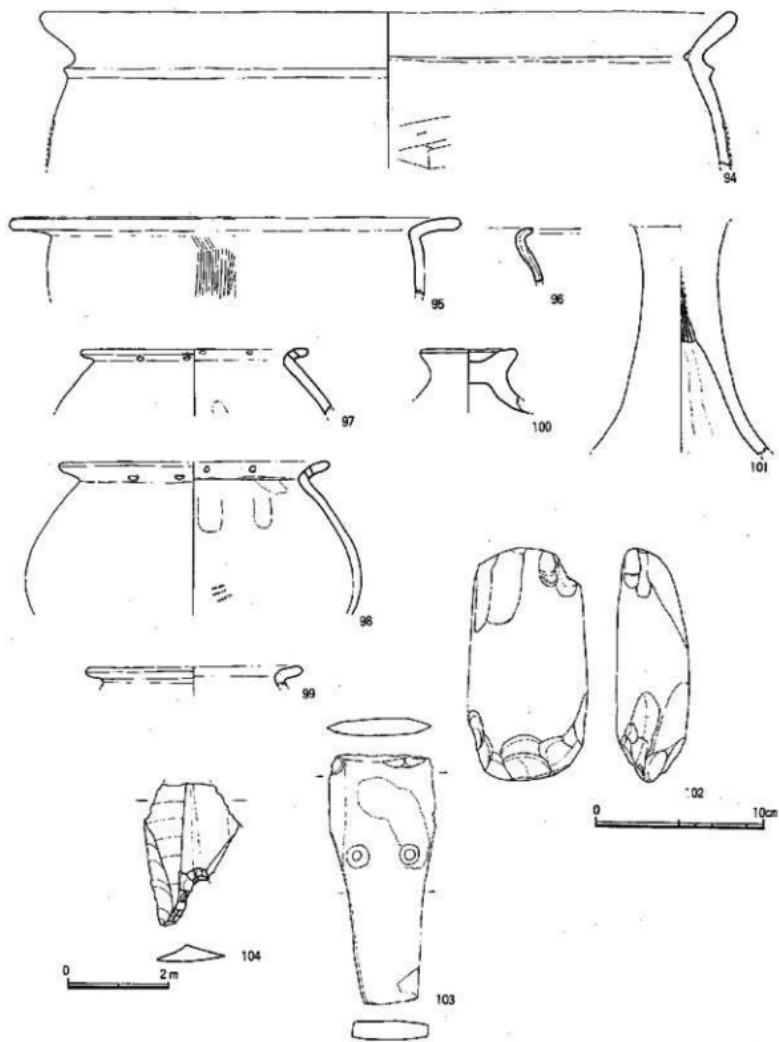
第23圖 SR015出土遺物測量圖(1)(1/3)



第24図 SR015出土遺物実測図(2)(1/3)



第25図 SR016出土遺物実測図(1/3)



第26図 SR016下層出土遺物実測図(1/3,1/1)

み目に赤色顔料が残る。48は支脚で出土が目立つ。49、50は壺の底部、51は壺の底部である。103は磨製石剣で001より出土した。

SR002 1区北側で検出した粗砂の流れである。北壁、東壁土層に見られる。遺物は土師皿と思われる細片が出土した。

SR012 2区中央北より調査区を北北西に横切るが、右岸は北に曲がり調査区北端まで肩が見られる。両岸の立ち上がりは明瞭である。遺物は弥生土器の他に須恵器等も出土していたが遺物が他と混ざり詳細は不明である。数点残った中には糸切り底の土師皿の細片が2層より出土している。

SR015 2区南半で黄褐色土層を切る河川である。下層と比べてやや粘質で暗い色調の1から4層の部分である。5層がこれらの左岸の肩をなし、右岸とほぼ平行する。SR016とは堆積時期の違いである可能性も多い。遺物はコンテナ2箱が出土した。最上層に須恵器が2点あるが他は弥生土器である。

52から63は壺である。52には赤色顔料が施される。58は口縁端部をね上げ状にあげている。61から68は壺である。64は内外面にスリップがかかり、外面頸部から口縁平坦面まで赤色顔料が施される。赤色顔料は内面に多く垂れ、口縁部直下は粗く1周、筆状のもので塗られる。外面にも滴が垂れる。頸部には暗文が施される。5層中に倒置された状態で出土し、2層の遺物と接合した。67、68は袋状口縁で粗が著しい。69、70は器台、71、72は支脚である。SR005同様に支脚が目立つ。73から76は壺の、77から79は壺の底部でいずれも赤色顔料が施される。102は磨製石斧で安山岩質である。

SR016 SR016の下の砂質層である。左岸は調査区外である。遺物はすべて弥生土器でコンテナ2箱が出土した。6層の砂礫層から多く出土した。9次調査ではこれに対する遺構はみられない。浅い谷状の地形に溜まったものとも考えられる。

80から93は5層からの出土である。80から84は壺である。83の外面には赤色顔料が施される。84から88は壺である。90、91の外面には赤色顔料が施される。89、90は壺の、91から93は壺の底部である。92は赤色顔料を施す。94から103は6層出土である。94から96は壺である。97から99は壺でいずれも赤色顔料が施される。100は蓋。101は高杯である。104は剥片鐵である。

弥生土器は中期の中ごろから後半のもので上下層で差はない。出土器種から生活遺構とともに壺棺墓の存在が周辺に予想される。

2) 土坑

SK003 1区の北東角に位置する。調査区外に広がるため全体のプランは不明だが円形の一角と思われる。深さ60センチを測り、砂質の埋土で、最下層には砂礫がたまる。遺物は少量であるが糸切り底の土師皿の小片がみられる。

SK004 1区の東壁にかかる。茶褐色の砂質土を覆土とする。長さ1m、幅50cm以上の楕円形を呈す。遺物は出土していない。

SK014 2区の中程にある。ピットに切られ規模がはっきりしないが、長さ1.2m、幅65cmの長方形になると思われる。深さは45cmを測り礫層に達する。遺物の出土はない。

V. 結語

今回の第8次・9次調査は狭長なトレンチ状の調査区であったために遺構個別の内容、時期等を把握するには困難が伴うが、幸いに隣接地では第4・5次調査が実施されている。それらの成果を援用することによってある程度の整理が可能であると考えられる。過去の報文との重複も多いと思われるが、ここではこれら4調査区の時期的変遷をまとめその一助としたい。

検出遺構の時期は弥生時代、古代、中世に大別される。以下時期別に主な遺構の位置付け及び若干の考察を述べていく。

弥生時代(第27図1) 中期後半から後期初頭の竪穴住居が第4次・5次・8次調査で計9軒検出されている。その分布は①(第4次北側/2軒)、②(第5次・8次B区南端/7軒)の2箇所に認められ、①は南西緩斜面上、②は北西緩斜面上に立地する。全体に土器出土量が少且て、詳細な時期推移は不明であるが、②は①より新相の遺物を含み、鉄製品の出土が顕著である。平面プランは円形(②4軒)及び方形(①2軒、②3軒)で、②では双方に重複関係がある。方形は円形に比するとその床面積は小規模である。なお、第4次2面、第8次B区で検出された多數のピット群中における該期の掘立柱建物の存在も否定できないが、今回は明らかにできなかった。北西約500mの沖積地に位置する岩本遺跡では中期中頃に掘立柱建物が竪穴住居の消滅以後出現している。また、第4次調査区では竪穴住居の他、中期後半の土坑等が散在する。第9次2区のSR015-016は中期末の埋没河川と考えられる。

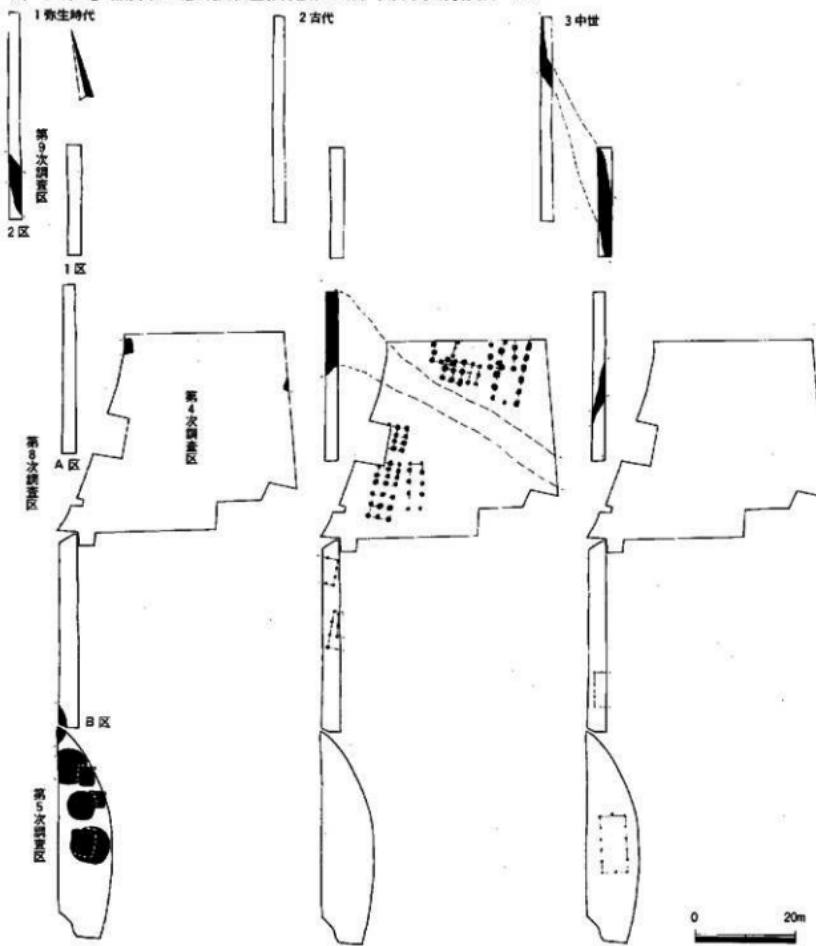
古代(第27図2) 第4次掘立柱建物・製鉄関連遺構等及び第8次B区掘立柱建物(SB054を除く)等が挙げられる。ここでは掘立柱建物の時期的変遷について述べる。まず、分布は第4次南東から第8次A区北側に流路をとるSR001(8世紀後半以降埋没)を介してその南北部分に①(第4次北側/5棟)、②(第4次南西側・第8次B区北側/7棟)が認められる。建物群の範囲は②の南側(第8次B区南側・第5次)には該期の遺構・遺物は希少であることから、第8次SB052付近が南限を示すものと考えられる。また第4次SB042の東側には遺構の広がりが看取されないことから、第8次東側の未調査域を含め、東限が想定される。西限は国道263号線を挟んで河川氾濫原になることが立会調査で確認されており、西限が窺える。①の北側には掘立柱建物が延長しており、その範囲は不明である。ただし、時期は異なるが第9次調査では北西方向に流路をとる河川が数本存在しており、谷状地形を呈していたことを勘案すると第4次調査区から北30mより以北へは連続しないと推定されよう。よってその範囲は最大で南北約100m、東西約50mと想定することができる。ただし、建物の柱穴掘り方には重複関係が認められることから、同時期併存は考えられない。建物の主軸方位を検討すると2群にグレーピングが可能で、I群(N-14°-18°-E/第4次SB031-042、第8次SB053)、II群(N-22°-24°-E/その他のSB)に分けられる。次に重複状況より前後関係を確認するとII群中で第4次SB068→SB067(規模が類似し、隣接していることから増築或いは立替えの可能性が高い)、SB068→SB070が認められ、I群中には認められない。また両群間では第4次SB030(II群)→SB031(I群)がある。これらの大型建物に官衙的な性格を付与し、主軸方位という企画性を重視した上で、重複関係・出土遺物との相関から帰属時期を推定すると、前出すると考えられるII群は8世紀後半を前後の時期の遺物が主体を占める。ただ、一部に7世紀の遺物を少量出土する建物(SB067-070)があるが、8世紀代の遺物を出土するSB068を切っており、該期にII群は収まるものと考えられる。また同群中には柱建物、縦柱建物が認められ、双方が機能を異にセッティングして存在すると想定すると同群東側のSB030-067-068(IIa)、西側のSB039-041-070-051-052(IIb)がそれぞれ併存する可能性を示しておきたい。またI群では9世紀中頃に位置付けられる遺物が複数SB031から出土している。よってIIa→IIb→I群が8世紀

後半以降9世紀中頃に変遷をとげたものと推測する。

中世（第27図3）該期の生活遺構は北側の第4次・8次A区・9次には少数で、土坑が散在する程度である。なお、出土遺物より第8次A区SR002は12世紀中頃、第9次1区SR001・005は11世紀後半から12世紀中頃の埋没河川と考えられる。該期の集落主体は遺構分布状況より第8次B区南側、第5次にある。掘立柱建物として確認できたものには12世紀中頃の第8次B区SB054、14世紀代の第5次SB01が挙げられる。第5次調査区では他に土坑、製鉄関連の遺構が検出されている。

註

- 1)『東入部遺跡群1』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集)福岡市教育委員会 1994
- 2)『東入部遺跡群2』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集)福岡市教育委員会 1994
- 3)『入部IV』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集)福岡市教育委員会 1994



第27図 第4・5・8・9次調査区遺構変遷図 (1/1,000)

図 版

第8次調査

図版1



(1) A区全景(南から)



(2) B区北側全景(北から)



(3) B区南側全景(北から)

図版2

第8次調査



(1) A区西壁土層(南東から)



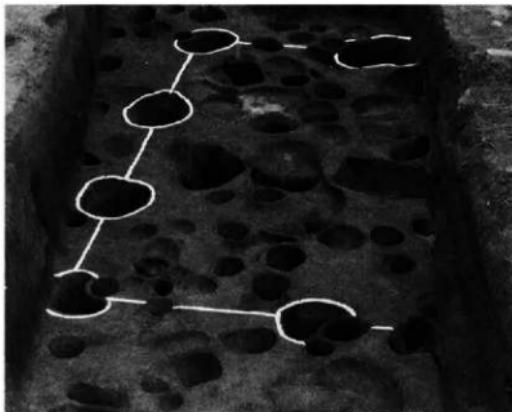
(2) B区北側東壁土層(北西から)



(3) B区南側東壁土層(北西から)

第8次調査

図版3



(1)B区 SB051(北から)



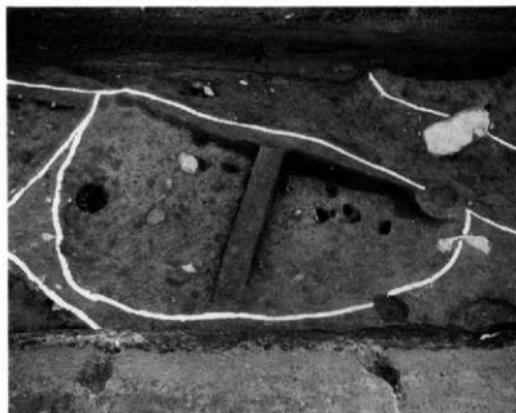
(2)B区 SC184(南から)



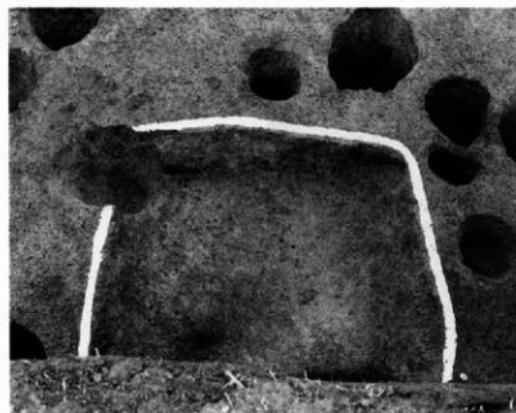
(3)B区 SC184土層(北から)

図版 4

第 8 次調査



(1)B区 SK003(東から)



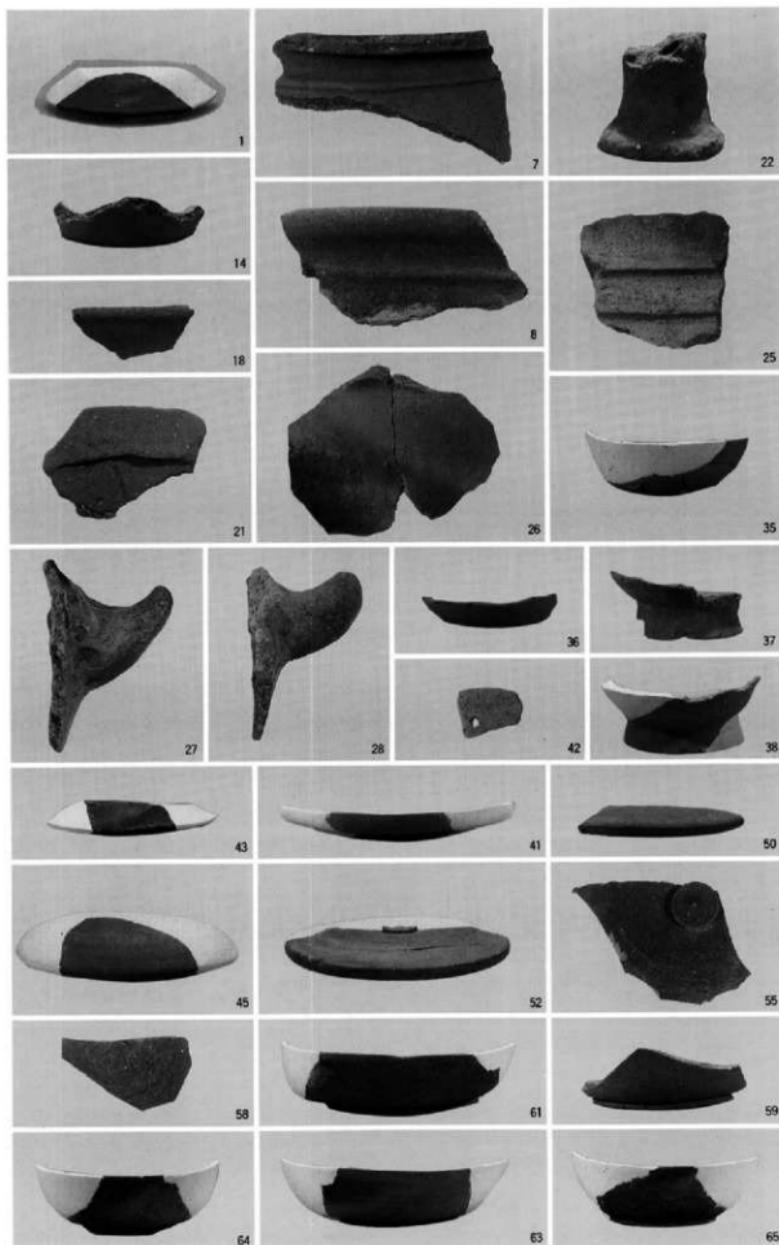
(2)B区 SK185(東から)



(3)作業風景

第8次調査

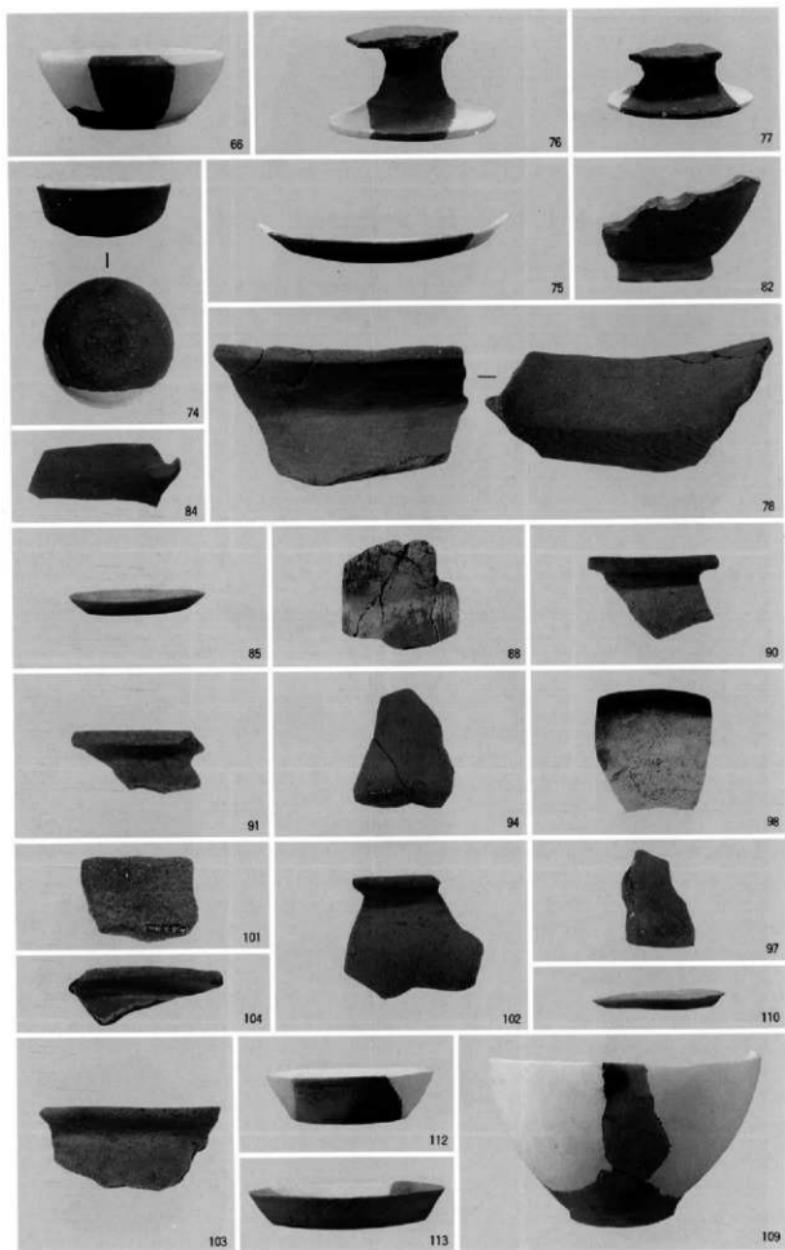
図版5



第8次調査 出土遺物 I

図版 6

第 8 次調査



第 8 次調査 出土遺物 II



(1) 1区南半(南から)



(2) 1区北半(南から)

図版 8

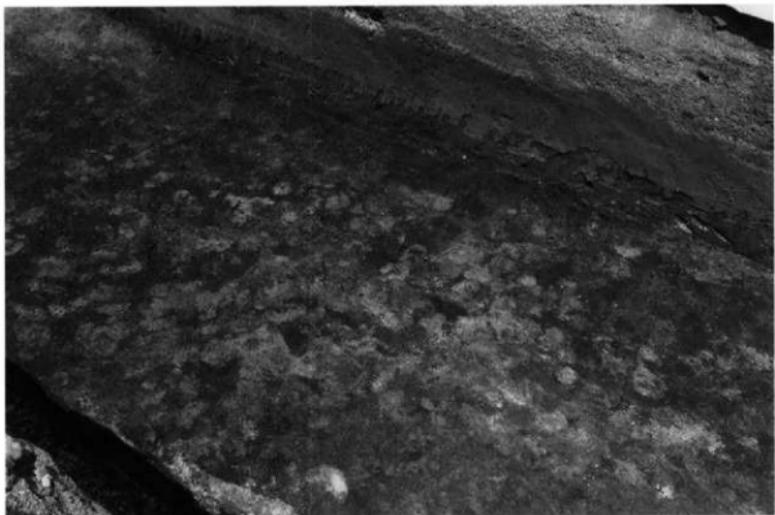
第9次調査



(1) 2区北半(南から)



(2) SR015(北から)



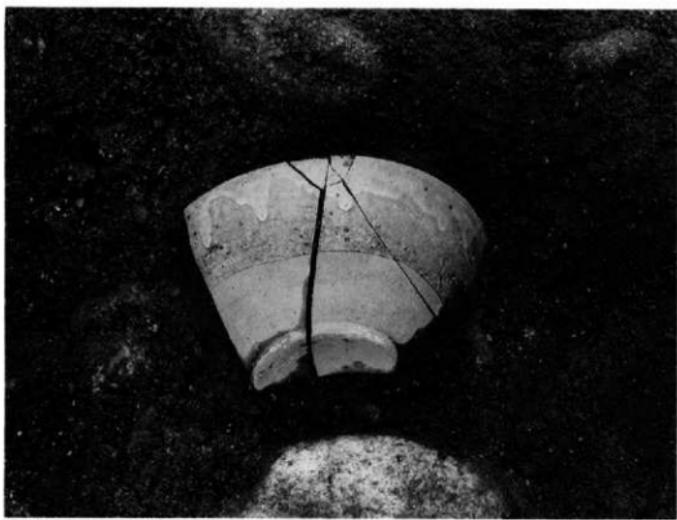
(1) 2区上面足跡状遺構(西から)



(2) SK014(東から)



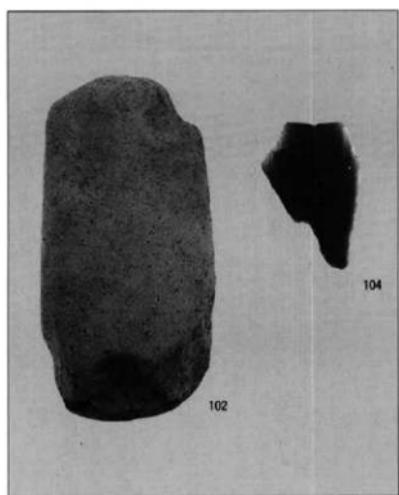
(1) SK003(東から)



(2) SR001遺物出土状況



(1)SR015西壁



(2)第9次調査 出土遺物 I

図版12

第9次調査



第9次調査 出土遺物II

ひがし いるべ 遺 跡 群 4

—第8次・第9次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第421集

1995年(平成7年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 セントラル印刷株式会社
〒810 福岡市中央区大宮1丁目5番13号
